『ティムールのワクフ文書』再考

杉　山　雅　樹

Re-examination of *The Waqf Deeds of Tīmūr*

SUGIYAMA, Masaki

In the Safavid chronicles written after the seventeenth century, there are anecdotes on the discovery of *The waqf deeds of Tīmūr* of 1602–3 that recorded Tīmūr's endowment for Khvāja ʿAlī, the leader of Safavid Sufi order. Horst, who analyzed one of the copies of this document in 1958, pointed out that the original document of *The waqf deeds of Tīmūr* was fake and produced during the reign of ʿAbbās I. However, his research has two loopholes: (I) He overlooked more obvious evidence indicating that this document was fabricated, and (II) did not examine the reason for its production. The purpose of this paper is to address these issues and to present a more accurate revised text of this document in an appendix.

First, we analyzed mistakes in *The waqf deeds of Tīmūr* that Horst overlooked; for example, in the title for Tīmūr, the name of his father, and the royal seal borne at the top of legal documents. Additionally, certain expressions are inconsistent with the definition of waqf in Islamic jurisprudence. These results lead to the conclusion that this document must have been fabricated in the post-Timurid era.

Next, we investigated the reason for the fabrication by researching the political situation during the reign of ʿAbbās I. Findings indicated that ʿAbbās I would have wanted to connect himself to Tīmūr in order to improve his position as the "perfect master," thereby legitimating his rule. On these grounds, we conclude that this document was produced around the court of ʿAbbās I to enhance the status of Safavid royal line by forging evidence of a relationship between Tīmūr and their ancestors.

はじめに
1. 文書の構成と来歴
2. ティムールとサファヴィー教団
　2.1 ホルストが利用した史料からの情報
　2.2 新たな史料からの情報
3. 『ティムールのワクフ文書』の問題点
　3.1 ティムールの名前と称号
　3.2 売買文書の形式と内容
　3.3 ワクフ文書の形式と内容
4. 文書偽造の背景
おわりに
付録：『ティムールのワクフ文書』校訂

Keywords: The Waqf Deed, Tīmūr, Safavid Sufi order, Khvāja ʿAlī, ʿAbbās I
キーワード： ワクフ文書，ティムール，サファヴィー教団，ホージャ・アリー，アッバース１世

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

はじめに

現存するアブディー・ベグ版サフィー廟不動産目録写本のうち，二つの写本（*ʿAbdī II*＝17 世紀後半作成，*ʿAbdī III*＝18 世紀初頭作成）[1] には，『吉兆なる合の主，ティムール・キュレゲンのワクフ文書 *Vaqfnāmcha-ʾi Ṣāḥib-qirān-i Amīr Tīmūr Gūrakān*』というタイトルを持つ文書の写しが収録されている（以下 *Vaqfnāmcha*）[2]。タイトルにある通り，この写しには，ティムール（在位 1370～1405）がサファヴィー教団の第 3 代教団長ホージャ・アリー[3]（1428 没）に対して行ったワクフ設定の文書が収められている。

ところで，上記の *Vaqfnāmcha* と全く同じ構成と，一部例外を除いてほぼ同じ記述内容を有しながら，異なるタイトルを持つ文書の写しが別に存在する。それが，『ティムールの認証付き文書 *Ṣukūk va Sijillāt-i Tīmūrī*』というタイトルで知られる文書の写しである（以下 *Ṣukūk*）。*Ṣukūk* は計三点の写本が現存し，それぞれアースターネ・ゴドセ・レザヴィー図書館（*Ṣukūk I*）[4]，テヘラン大学附属中央図書館（*Ṣukūk II*），マレク図書館（*Ṣukūk III*）に所蔵されている[5]。

この *Vaqfnāmcha* と *Ṣukūk* との関係については記録が一切残されておらず，詳細は明らかではない。しかし，両者を比較してみると，いくつかの相違があることに気付く。例えば，*Vaqfnāmcha* では，二写本ともに，明らかに数行写し忘れたと思わしき箇所があり，その部分はそのままでは意味をなさない［*ʿAbdī II*: 386］。それに対して，*Ṣukūk* の該当する箇所では数行多く書かれていて，文章としても成り立っていることが確認できる［*Ṣukūk I*: 4b］。さらに，*Vaqfnāmcha* と *Ṣukūk* の冒頭部分にはいずれも「文書の来歴」が書かれているが，後者は前者のおよそ七倍の分量があり，より詳細に説明されている。もちろん，これだけをもって両者の参照関係を証明することはできないが，少なくとも *Ṣukūk* の方が *Vaqfnāmcha* よりも正確に元の文書の内容が反映されていると考えて間違いないだろう。なお，本稿では煩雑になることを避けるため，今後は必要な場合を除いて基本的に *Vaqfnāmcha* と *Ṣukūk* を区別せず，共に『ティ

---

1) *ʿAbdī II* と *ʿAbdī III* を比較した結果，前者の方がより正確に書写されていることが明らかである。そのため，本稿ではアブディー・ベグ版に収録された *Vaqfnāmcha* の参照箇所を示す場合，基本的に *ʿAbdī II* のみを挙げる。

2) その他，19 世紀に編纂されたサフィー廟不動産目録要約版の二写本（*Kitābcha-ʾi Khulāṣa I*, *Kitābcha-ʾi Khulāṣa II*）にも収録されている。アブディー・ベグ版の二写本に収録された写しと，この 19 世紀版の二写本に収録されたものとを比較すると，19 世紀版の一つ *Kitābcha-ʾi Khulāṣa I* では I「文書発見後に付け加えられた序文」（本文書の構成については第 1 章で述べる）が省略されている以外は，全体的な構成と内容はほぼ同じである。そのため，本稿では今後 *Vaqfnāmcha* に言及する際，作品の編纂時期という点でも，写本の成立年代という点でもより古い，アブディー・ベグ版に収録されているものを参照する。なお，19 世紀版の不動産目録要約版の詳細については，本論集収録の阿部論文を参照のこと。

3) サフィー・アッディーンの孫，サドル・アッディーンの息子にあたる。父の死後，サファヴィー教団の教団長の位を継承した。1428 年にメッカ巡礼からの帰路，イェルサレムで死去した［Horst 1985］。

4) この写本に関しては，本研究グループのメンバーでもある，杉山隆一氏のご厚意により複写を入手することができた。ここに記して謝意を表する。

5) この三つの写本のうち，書写年が明記されているのは *Ṣukūk II* だけであるが（1038/1628–9 年書写），最も書写年が古く，信頼性が高いと考えられるのは，*Ṣukūk I* である。その理由としては，*Ṣukūk I* で使用されている書体が最も古いことや，*Ṣukūk II* 及び *III* が雑録（majmūʿa）の一部であるのに対して，*Ṣukūk I* は本作のみで一冊の写本として装丁されていることが挙げられる。さらに，本文で後述するように，本作品では他の史料では確認できない独自のサフィー家の系譜が複数回登場するが，*Ṣukūk II* および *III* ではそれぞれで示されている複数の系譜の間で一致しない箇所があるのに対して，*Ṣukūk I* では提示されている複数の系譜の内容については整合性がとれている。以上のことから，*Ṣukūk I* が最も正確に記録されているとみなすことができる。そのため，本稿では *Ṣukūk* の参照箇所を示す場合，基本的に *Ṣukūk I* のみを挙げる。

ムールのワクフ文書』と呼ぶことにする[6]。

さて，先に挙げた *Ṣukūk* の三写本のうち，*Ṣukūk I* については，ホルストが既にその内容分析を行っている。彼は最終的に，この写しの元になった文書はティムール朝時代のものではありえず，サファヴィー朝君主アッバース1世（在位1588〜1629）治世中，16世紀後半から17世紀初頭にかけての時期に捏造されたものである，と結論付けている[7]［Horst 1958: 45–47］。ホルストがこの結論に至った主要な根拠をまとめると，以下の七点に絞ることができる。(1) 本文書の中で，サフィー家がサイイド家系であるという主張がなされているが，この主張はホージャ・アリーの時代には存在しなかったものである[8]。(2) 文書に書き写されたティムールの印璽の銘文が，実際のものとは異なる[9]。(3) ホージャ・アリーがティムールに語ったとされる初代イマーム，アリーの予言は，明らかに後世に捏造されたものである[10]。(4) 売買文書やワクフ文書では本来必須となる，物件の四囲の説明が欠けている[11]。(5) ティムール朝年代記と，アッバース1世治世以前に編纂されたサファヴィー朝年代記に，ティムールとホージャ・アリーとの関わりを示す記録がない[12]［Horst 1958: 37–45］。(6) 通常文書では使用されない表現が含まれている[13]。(7) 途中挿入されたアラビア語の文章には，文法上の初歩的な誤りが数多く存在する[14]［ibid.: 46］。

紙幅の制限により，本稿では上記の指摘を一つ一つ精査する余裕はないが，それぞれ一部修正すべき，あるいは情報を追加すべき箇所はあるものの，いずれもおおよそ妥当なものである。このことから，*Ṣukūk* の元になったとされる文書はアッバース1世治世の贋作とする彼の結論そのものは，十分に説得力があるといえる[15]。

しかし，ホルストの研究には，以下のような二つの問題点がある。一つ目は，本文書がティムール朝期に作成されたワクフ文書では

6）本稿では煩雑になるのを避けるため，『ティムールのワクフ文書』の参照箇所を示す場合，*Ṣukūk* と *vaqfnāmcha* から一写本ずつ，つまり *Ṣukūk I* と *ʿAbdī II* のみを挙げる。

7）Horst は同じ箇所で，特に文書が発見された1602–3年直前に偽造された可能性が高い，と述べているものの，その根拠は示していない。

8）Horst は，サフィー家はサイイド家系であるという主張がサファヴィー朝成立以降に生まれたものとしている［Horst 1958: 24］。しかし，近年の研究によれば，この主張は既に1460年代前半には知られていたことを示す史料が存在する［Morimoto 2010］。このことから，Horst の説は一部修正する必要がある。

9）Horst によれば，文書に書き写されたティムールの印璽には「アッラー，ムハンマド，アリー」，「公正さは救済なり（rāstī rastī）」，「〔神の〕僕たる（al-ʿabd）ティムール」という文言が入っているが，本物のティムールの印璽にあるのは二つ目の文言だけである［Horst 1958: 34–35］。

10）アリーが夢に現れ，ホージャ・アリーに対して，四世代後の子孫が諸国の帝王となり，その子孫（farzand）が世界征服者となる，と語ったとされる［*Ṣukūk I*: 7b; *ʿAbdī II*: 388］。なお，Horst は，前者をイスマーイール1世，後者をタフマースブ1世あるいはその後継者に比定しているが［Horst 1958: 35–36］，後者はアッバース1世を指していると考えるべきであろう。

11）売買文書やワクフ文書では，売買対象あるいはワクフ物件となる土地の説明では必ず四囲の境界が示される［ibid.: 36］。なお，これについては，第3章で改めて述べる。

12）この点に関しては，第2章で改めて検討する。

13）「この文章を読む人々にとって，以下のことが隠されたままでないように」［*Ṣukūk I*: 3b, 7b; *ʿAbdī II*: 385］や，「読者がうんざりしないように」［*Ṣukūk I*: 5b; *ʿAbdī II*: 387］といった表現は，叙述史料で用いられるものであり，通常文書では使用されない［Horst 1958: 46］。

14）この点に関しては，第3章で改めて指摘する。

15）*Ṣukūk* に関する最新の研究として，本文で後述する Delbarī 2018 がある。しかし，Delbarī は，本文書の真偽に関する明確な見解を示していない。例えば，論文の冒頭では *Ṣukūk* を「ヒジュラ暦9世紀のティムール朝期から現在にまで残る文書の一つ」と紹介する一方［ibid.: 261］，本文ではこの文書を後世の贋作とする他のイラン人研究者の指摘を引用している［ibid.: 269–271］。また，本文書を扱った専論として Horst 1958 を挙げているものの，これを贋作とする Horst の主張には全く触れていない［cf. Delbarī 2018: 273］。以上のことから，文書の真偽に関する Delbarī の態度は著しく説得力を欠いていると言わざるをえない。

ないことを示す，より明白な証拠をいくつか見落としていることである。二つ目の問題点は，そもそもなぜこの文書が捏造されたのか，という根本的な疑問に一切検討を加えていないことである。

そこで，本稿は，ホルストの研究において当時の史料環境のために根拠が不十分であった点を補足した上で，先に挙げた二つの大きな問題点をそれぞれ解決することを目的とする。まず，本文書の構成と来歴を簡単に紹介した後，ホルストの時代には知られていなかった史料を利用して，ティムールとサファヴィー教団の教団長との邂逅に関する記述内容の変遷を検証する。次に，ホルストが挙げていなかった，より明白な証拠を提示することによって，『ティムールのワクフ文書』が後世偽造されたものであることを改めて指摘する。続いて，実際にワクフ文書が偽造された例を引き合いに出しつつ，当時のサファヴィー朝を取り巻く政治状況や，同朝におけるティムールの位置付けを踏まえて，この文書が偽造された背景を検証する。以上のような検証は，本文書がサフィー廟不動産目録に収録された理由を明らかにすることにつながるであろう。

なお，『ティムールのワクフ文書』の出版されたテキストとしては，長らくホルストの研究に掲載された *Ṣukūk I* のファクシミリ版しか存在しなかったが，近年イランにおいて *Ṣukūk* の 3 つの写本に基づく校訂テキストが発表された［Delbarī 2018: 273–289］。ただ，この校訂テキストには，明らかな単語の選択の誤りや綴りの間違い，文章の欠落など，問題となる箇所がいくつも存在する。本稿第 3 章で述べる通り，元々『ティムールのワクフ文書』そのものに多くの誤りが含まれているが，デルバリーによる校訂テキストを利用する際にはそれに加えて上記のような新たな問題に注意を払う必要があり，このテキストに基づいて正確な史料批判を行うことは極めて困難である。そこで，本稿では文書の真偽に関する議論をより説得力のあるものにするため，*Ṣukūk* と *Vaqfnāmcha* からそれぞれ二写本を利用して新たに校訂作業を行い，本稿の最後に付録として『ティムールのワクフ文書』のテキストを付した。

1. 文書の構成と来歴

本章では，『ティムールのワクフ文書』について，全体の構成と来歴を簡単に確認しておきたい。

この文書の写しには，ティムールがホージャ・アリーに対して行ったワクフ設定の文書が収められているが，それ以外にも様々な内容の記述や文書が含まれている。全体的な構成は，以下の通りである[16)]。

Ⅰ．文書発見後に付け加えられた序文（文書の来歴）

Ⅱ．文書の写し

（1）序文とホージャ・アリーの系譜

（2）逸話（ホージャ・アリーとティムー

16）本稿で用いる『ティムールのワクフ文書』の構成は，全体をⅠ「後世付け加えられた序文」とⅡ「文書の写し」の二部に分ける点では，Horst が示した構成と共通している。ただし，Horst は，Ⅱを a）ワクフ文書（第一の印璽群，宗教的導入部／ホージャ・アリーの系譜／第二の印璽群，ホージャ・アリーとティムールの三度にわたる会見／ワクフ設定），b）売買文書①，c）売買文書②，d）売買文書③，e）ワクフ文書の結語，に分類している［Horst 1958: 32］。しかしながら，Horst が「ワクフ文書」という名称を与えた a の内容を確認すると，ホージャ・アリーとティムールとの邂逅に関する奇跡譚がその大半を占めているだけでなく，叙述史料で目にすることはあっても，通常文書では使用されない表現が数多く確認できる。以上のことから，Horst が a としてまとめたものをワクフ文書と呼ぶのは無理がある。そのため，本稿では，Horst が a とした部分を，「序文とホージャ・アリーの系譜」，売買文書とワクフ文書が作成されるに至った経緯を説明するための「逸話」，「ワクフ文書①」という三つに分割した。ただし，本稿で用いるこの構成についても，あくまで便宜的なものであることを付言しておく。

ルとの関わり）
(3) ワクフ文書①
(4) 売買文書①
(5) 売買文書②
(6) 売買文書③
(7) ワクフ文書②

まず，Ⅰでは，サファヴィー朝君主アッバース1世がこの文書を入手した経緯が述べられている。その後Ⅱの文書の写しに入り，(1) ではアリーからサフィー・アッディーンを経てホージャ・アリーに至る系譜について[17]，(2) ではティムールとホージャ・アリーとの三度にわたる邂逅について記述される[18]。その後，(3) ではティムールによるホージャ・アリーとその子孫に対するワクフ設定，及びこのワクフを侵害することに対する警告が述べられる。続いて，(4)～(6) の三通の売買文書でティムールが複数の土地を購入したことが説明され，(7) では彼がこれらの不動産をワクフ設定したことが再度述べられた後，管財人職に関して簡潔に言及されている。なお，Ⅱの文書群において，(4) (5) (6) (7) の末尾にはそれぞれ806/1403–4年に作成されたことが記されており，ティムールの名前の後には通常存命中の支配者に対して付される祈願文が挿入されている[19]。以上のように，後世この文書が偽造される際に，あたかもティムールの在世中に作成されたかのように書かれていることが分かる。

さて，この『ティムールのワクフ文書』の元になった文書は，どのような経緯でアッバース1世が入手するに至ったのであろうか。Ⅰ「後世付け加えられた序文」にある文書の来歴に関する説明によれば，1011/1602–3年に行われたアッバース1世によるバルフ遠征の際，アンドフード城砦の征服に成功したとき[20]，木の中に隠されていたワクフ文書（vaqfnāmcha）が偶然みつかり，アッバース1世の許にもたらされたという［*Ṣukūk I*: 2a-b; *ʿAbdī II*: 385］。この逸話については，サファヴィー朝の年代記『アッバースの世界を飾る者の歴史 *Tārīkh-i ʿĀlam-ārāy-i ʿAbbāsī*』（1629年完成，以下 *ʿĀlam-ārā*）でも，以下のように記述されている。

> バルフ遠征におけるアンドフード城征服の際，古い書体（khaṭṭ）で書かれ，モンゴルの朱印（āl tamghā）とアミール・ティムールの印璽が押されたワクフ文書（daftar-i vaqfiya）が聖戦士たちによって発見され，最も気高く高貴にして神の影たるシャーの視線の先に届けられた。［*ʿĀlam-ārā*: 16］

後述するように，同文書は後世の贋作であったと考えられることから，上記のアンドフードでの文書の発見そのものも自作自演だった可能性がある。ただ，この引用文からは，同文書発見にまつわる逸話は，サファヴィー朝宮廷において共有されていたことが確認できる。

以上のように，『ティムールのワクフ文書』は，ティムールが行ったとされる，売買やワクフ設定を記録した文書の集成であった。そして，アッバース1世治世の本文書の発見譚は，その後のサファヴィー朝年代記に記録され，後世に伝えられたのである。

---

17) Kasravī は，他の史料に見られるサフィー・アッディーンの系譜と比べて，この系譜には多くの誤りが含まれていることを指摘している［Kasravī 1927: 803–806］。
18) 『ティムールのワクフ文書』の中で最も多くの分量を占めるのが，この箇所である。詳細については，Horst［1958: 27–29］を参照のこと。
19) ティムールの名前の後に「神が彼の王国とスルターン位を永続させ，彼の慈善と善行を諸世界に注ぎ込みますように」という祈願文が挿入されている［*Ṣukūk I*: 8a; *ʿAbdī II*: 389］。
20) アッバース1世によるバルフ遠征とアンドフードの征服については，ブロー［2012: 116–120］を参照のこと。

2. ティムールとサファヴィー教団

本章では，ティムールとサファヴィー教団の教団長との関係について改めて検証する。「はじめに」で述べた通り，ホルストは，ティムール朝年代記はもちろん，アッバース 1 世治世以前に編纂されたサファヴィー朝年代記にも，両者の関わりを示す記述がない，と指摘している。ただし，ホルストが検証を行った当時は知られていなかったものの，後にその存在が明らかになったサファヴィー朝期の史料がいくつかあり，その中にはティムールとサファヴィー教団の教団長との関わりについて言及しているものがある。以下では，最初にホルストが利用した史料から得られる情報をまとめた後[21]，近年その存在が知られるようになった史料の記述に基づいて，ティムールとサファヴィー教団の教団長との関係を再検証する。

2.1 ホルストが利用した史料からの情報

まず，ティムールとサファヴィー教団の教団長との関係について，ホルストが利用した史料から得られる情報をまとめておきたい［Horst 1958: 42–45］。

Hosrt によれば，サファヴィー朝年代記のうち，ティムールとサファヴィー教団との関わりについて言及しているのは，16 世紀末に完成した『歴史精髄 *Khulāṣat al-Tavārīkh*』（1591 年完成，以下 *Khulāṣat*）と 17 世紀前半に編纂された *ʿĀlam-ārā*（1629 年完成）である。しかし，この二つの作品では，ティムールが会見したサファヴィー教団の教団長が異なる。すなわち，*ʿĀlam-ārā* では『ティムールのワクフ文書』と同じくホージャ・アリーとされているのに対して，*Khulāṣat* ではその父サドル・アッディーン・ムーサー（1377 没）とされているのである[22]。

一方，ホルストは明言していないものの，*Khulāṣat* と *ʿĀlam-ārā* との間にはもう一つ大きな違いがある。それは，ティムールによるワクフ設定に言及しているか否かという点である。すなわち，*Khulāṣat* では，ティムールがサドル・アッディーンの要望に応えて，ルームから連行した捕虜を解放したことが述べられているだけで，ワクフ設定については一切言及がない［*Khulāṣat*: I 32–33］[23]。それに対して，*ʿĀlam-ārā* ではティムールがホージャ・アリーと三度邂逅を果たしたこと，ホージャ・アリーの要請を受けてルームから連行した捕虜を解放したこと，さらに前章で引用したように，バルフ遠征の際に『ティムールのワクフ文書』が発見されたこと，が述べられている［*ʿĀlam-ārā*: 15–16］。やや遠回しな表現であるが，ワクフ文書の存在とその発見に言及することで，ティムールがホージャ・アリーに対してワクフ設定したことが示されているのである。このことから，*ʿĀlam-ārā* は『ティムールのワクフ文書』の内容をほぼ踏襲しているとみなすことができる。

2.2 新たな史料からの情報

次に，ホルストの研究が発表された当時は知られていなかった史料の中で，ティムール

21）Horst の研究では，十分な史料批判を十分に行わないまま，後世の作品をあたかもアッバース 1 世治世以前に成立したもののように扱っている箇所がある［Horst 1958: 40–41］。例えば，Horst は，*Ross Anonymous* として知られた *Tārīkh-i Shāh Ismāʿīl-i Ṣafavī* という作品について，その編纂時期を検証しないまま内容分析を行っているが，この作品はアッバース 1 世治世以降に編纂されたことが指摘されている［羽田 1989］。

22）*ʿĀlam-ārā* では，「人々の間では，アミール・ティムールが会見した相手はスルターン・サドル・アッディーン・ムーサーであったと言われている。［中略］しかし，正しくはスルターン・ホージャ・アリーである」と，わざわざ訂正が加えられている［*ʿĀlam-ārā*: 16］。

23）なお，後世書写された *Khulāṣat* の一写本には，ティムールがサドル・アッディーンと会見したときに，自身の私有地をワクフ設定し，その管財人にホージャ・アリーを指名した，という情報が追加されている［*Khulāṣat*: II 928; Horst 1958: 42］。

とサファヴィー教団の教団長との関わりについて記述しているものを紹介する。さらに，それぞれの作品の中で，前節で確認した（1）ティムールが会見した相手，及び（2）ワクフ設定への言及の有無，という史料間の相違点について，それぞれどのように記述されているか確認しておきたい。

一つ目の史料は，*Khulāṣat* の情報源になったとされる，『世界を飾る者の歴史 *Tārīkh-i Jahān-ārā*』（1563 年完成，以下 *Jahān-ārā*）である［Quinn 2000: 86–87］。本作品にはサファヴィー教団の歴代教団長の事績を紹介する章があり，その中のサドル・アッディーンの項でティムールが彼の許に伺候したことが簡潔に記されている［*Jahān-ārā*: 261］。このように，*Khulāṣat* と同じく，*Jahān-ārā* でもティムールが会見した相手はサドル・アッディーンとされており，ワクフ設定についての言及もない。ただし，*Jahān-ārā* では捕虜の解放についても触れられていない。このことから，*Khulāṣat* はティムールとサドル・アッディーンの逸話に関しては別の情報源を基にして書かれたと考えられる。

二つ目は，『ハヤーティー史 *Tārīkh-i Ḥayātī*』（1554 年以降完成，以下 *Ḥayātī*）である。この作品は，ティムールとサファヴィー教団の教団長との接触に関わる記述が含まれる史料の中で，最も完成年が古いと考えられるものである。その中で，以下のような両者のやりとりが記録されている。

> 今は亡き帝王アミール・ティムール・キュレゲンは聖者たちのスルターン（＝サドル・アッディーン）への伺候に達したとき，しかるべき敬意を払った後でかのお方に「何でもお命じになって下さい」と願い出た。かのお方は低俗な現世の虚飾を放棄なさっていたので，現世と関わりのあることに手を染めることはなさらなかった。アミール・ティムールがしつこく食い下がったので，かのお方は次のことをお望みになった。「ルーム地方から捕虜として連れてきた者たちを解放し，自身の故郷へ帰るのを赦してやって欲しい」と。ティムールはかのお方の望みを叶えた。［*Ḥayātī*: 90–91］

やはり会見の相手はサドル・アッディーンとされているが，こちらは *Khulāṣat* と同じく，サドル・アッディーンがティムールにルームから連行した捕虜を解放するよう依頼したことが述べられている。

以上の史料の記述から，16 世紀後半の時点で知られていた逸話は，ティムールがサドル・アッディーンと会見し，その要請を受けて捕虜の解放が行われた，というものであったことが分かる。やがて，サファヴィー朝年代記の中で（1）ティムールが会見した相手がサドル・アッディーンからホージャ・アリーに変更，(2) ティムールによるワクフ設定に言及，という記述面での二つの変化が生まれる。この二つの変化が最初に確認できる年代記が，17 世紀前半に編纂された *ʿĀlam-ārā* であり，その傾向はその後編纂された史料でも受け継がれていくのである[24)]。しかし，年代記というジャンルから離れて，あらゆる史

24）例えば，シャー・スライマーン治世（在位 1666〜94）に編纂された『サフィー家の系譜 *Silsilat al-Nasab-i Ṣafavīya*』（以下 *Silsila*）では，ティムールによるワクフ設定のみならず，ティムールとホージャ・アリーとの三度にわたる邂逅についても詳しく記述されている［*Silsila*: 45–49］。また，1635 年に完成した『最良の歴史 *Afẓal al-Tavārīkh*』第三巻では，ティムールがバイラカンで再開発事業を行い，そこからの収益をサフィー廟に対するワクフに設定したことが記録されている［*Afẓal*: 469–470; Melville 2020: 117–118, 125］。なお，ティムール朝期年代記では，ティムールによるバイラカンでの再開発事業については記述があるものの，ワクフ設定には触れられていない［*Ẓafar-nāma*: 1218–1220, 1225–1227］。ティムールおよびアッバース 1 世によるバイラカンの開発とワクフ設定については，本論集収録の近藤論文も参照のこと。

料を対象とした場合，17 世紀初頭に発見されたという『ティムールのワクフ文書』こそが，*ʿĀlam-ārā* よりも先に上記の二つの変化を記録した史料であったといえるだろう。

では，なぜこのような変化が生じたのであろうか。まず，会見相手が変更された理由については，先に引用した *Ḥayātī* の逸話に含まれる，ティムールがサファヴィー教団の教団長の要請を受けて「ルームから連行した捕虜」を解放した，という記述と大きく関わってくると考えられる。歴史上，ティムールがルームのオスマン朝領に遠征したのは，1402〜4 年のことであった［Manz 1989: 73］。その帰還途中に会見した相手が，1377 年に死去しているはずのサドル・アッディーンであったとすれば大きな矛盾が生じてしまう[25]。つまり，16 世紀後半の時点では，ティムールがサドル・アッディーンの要請に応じて捕虜を解放したという逸話が知られていたが，17 世紀初頭頃に文書の偽造が行われた際，そこに矛盾があることに気付いた人物によって，ティムールと会見した相手がサドル・アッディーンからホージャ・アリーに変更されたと考えられる[26]。

二点目の，ワクフ設定に言及されるようになった理由については，この出来事が初めて記録されたのは『ティムールのワクフ文書』であったことからも，この文書の偽造こそがその後の年代記で言及される契機になったと考えられる。では，そもそも『ティムールのワクフ文書』が偽造された背景には何があったのであろうか。この問題については，サファヴィー朝政権側の狙いとも大きく関わってくると考えられるため，第四章で改めて検討したい。

3.『ティムールのワクフ文書』の問題点

「はじめに」で述べた通り，『ティムールのワクフ文書』に含まれる様々な問題点については，既にホルストによってそのいくつかは指摘されている。本章では，ホルストが挙げていないその他の問題点について，「ティムールの名前と称号」，「売買文書の形式と内容」，「ワクフ文書の形式と内容」という三つの観点から検討を加え，本文書が後世の贋作であることを示すより明確な証拠を提示したい。

3.1 ティムールの名前と称号

『ティムールのワクフ文書』Ⅱ（2）のホージャ・アリーとティムールの逸話において，最初にティムールに言及される箇所では，彼の名前の前に「最大にして偉大なるハーカーン（khāqān al-aʿẓam al-muʿaẓẓam）」という称号が付されている［*Ṣukūk I*: 3b; *ʿAbdī II*: 385］。また，その後もティムールの名前

25）16 世紀後半（982〜996/1574–5〜1587–8 頃）にオスマン朝領内で作成された，サファヴィー朝のキジルバシュに対する不信仰者宣告書では，ティムールがサフィー・アッディーンと会見し，彼の要望に応じて捕虜の解放を行ったと書かれている［*Takfīr*: 709–710］。ティムールが 14 世紀前半に死去しているサフィー・アッディーンと会見していることはさらにありえないことである。ただ，ティムールとサファヴィー教団の教団長との会見，教団長による捕虜の解放依頼とその実現，という逸話の核となる部分は，サファヴィー朝支配領域外でも知られていたという点は興味深い。なお，この史料については，本研究グループのメンバーでもある，近藤信彰氏にご教示いただいた。この場を借りて謝意を表する。

26）『ティムールのワクフ文書』では，三度目の邂逅を果たし，ティムールがホージャ・アリーの弟子となったところまでは詳細に説明されているものの，その後ティムールがルームの捕虜たちを師に与えたことについてはごく簡潔に述べられているだけである。さらに，続けて「この逸話に関する解釈は数多くあるが，読者をうんざりさせる恐れがあるので，文書ではこれ以上述べることはできない」として早々に話を切り上げている［*Ṣukūk I*: 8b; *Abdī II*: 387］。このような記述が残された背景として，ティムールの会見相手を変更したために，文書を偽造した人物が既に知られていたこの逸話に深く立ち入ることを避けようとしたためであった，とも考えられる。

が述べられる際には，しばしば名前の直後に「ハーン（khān）」という称号が付されている［*Ṣukūk I*: 3bff.; *ʿAbdī II*: 387ff.］。しかしながら，ティムールは，チンギス・ハンの血引く人物をハーンに擁立して，自らはその補佐役の立場に留まったことで知られている。生前彼が自ら使用した称号は，軍司令官を意味する「アミール」やチンギス家の娘婿を意味する「キュレゲン」であり［Manz 1989: 14–16; 間野 2001: 334–336］，チンギス・ハン以降，本来その末裔のみが名乗ることを許された「ハーン」または「ハーカーン」を使用することはなかったはずである。

次に問題となるのが，ティムールの父の名前やその他の名前の要素である。本文書ではティムールの父やニスバについて，「チャガタイとして知られ，シャブルガーニーとして知られた，アミール・ジャハーンギールの息子，ティムール・シャー」と述べられている［*Ṣukūk I*: 3b; *ʿAbdī II*: 385］。まず，ティムールの父は通常「タラガイ Ṭaraghāy」という名で知られる人物であり［Woods 1990: 17; 間野 2001: 323–333］，「アミール・ジャハーンギール」という名で紹介されている例を筆者は寡聞にして知らない。また，ティムールや彼の祖先が西チャガタイ・ハン国においてトルコ化・イスラーム化したモンゴル部族を指す「チャガタイ」と呼ばれたのはいいとしても，「シャブルガーニー」というニスバが使用された例も史料では確認できない。

第 1 章で確認したとおり，『ティムールのワクフ文書』のⅡは全てティムールの在世中に作成された文書の写しということになっているが，ティムールの称号や父の名前に関する記述には他の同時代史料の記述と相容れない要素が含まれているのである。

3.2 売買文書の形式と内容

続いて，『ティムールのワクフ文書』Ⅱ（4）～（6）にある，三つの売買文書の形式と内容について確認しておきたい。

まず，それぞれの文書の冒頭に書き写されたティムールの印璽や朱印についてであるが，第 1 章で挙げた *ʿĀlam-ārā* からの引用によって，元になった文書にはそれらが押されていたことが確認できる。『ティムールのワクフ文書』にあるのは，それらを書き写したものと考えることができる。しかし，これらの印璽に関しては，既にホルストが指摘しているように，従来ティムールの印璽として知られたものとは全く異なる文言が含まれており，本物であったとは考えられない。さらに，そもそも売買文書やワクフ文書に押されるべきはカーディーや証人の印章であり，本文書に含まれているような君主の印璽やアリーの名が書かれた印章ではない。

次に，売買文書の形式についてであるが，いずれの文書も売買契約の流れが反映されており，全体の構成としては特に問題はない[27]。むしろ，この三つの売買文書が抱える最大の問題は，ホルストが指摘しているように，売買目的物である土地について，それぞれの地名とどの地方に属しているかが列挙されているだけで四囲が一切明記されていないことである[28]。これについては，次のワクフ文書においても同様であり，次節で改めて述べる。

さらに，売買文書②と③の末尾にはアラビア語による定型句らしき文言が書かれている。しかし，この文言は，15 世紀のサマルカンドで作成された同時代の文書群［Chekhovich 1974］を始め，他の売買文書では確認できない。また，この文書のアラビア語による定型句らしき文言には明らかに文法的な誤りがあり，そのままでは文章になっ

27）売買文書の本文部分の全体的な構成については，ガージャール朝期のイランで作成されたものが対象であるが Werner［2003: 20–32］が参考になる。

28）売買目的物となった，複数の土地の地名と場所の確定については，Delbarī が注で比較的詳しい説明を加えており［Delbarī 2018: 285–288］，参考になる。

ていない箇所がある［*Ṣukūk I*: 11a, 11b–12a; *ʿAbdī II*: 392］。ただし，これについては元になった文書には正しく書かれていたものの，書写されるときに誤記されただけという可能性もある[29]。

以上のように，売買文書については，全体の構成としてはそれなりに要件を満たしているものの，購入した不動産の説明やアラビア語の文言に問題がある。ただ，これらの問題だけで『ティムールのワクフ文書』全体の真偽を決定するには至らない。そこで，次節では，ワクフ文書について検証を進めていきたい。

3.3 ワクフ文書の形式と内容

次に，『ティムールのワクフ文書』Ⅱ（3）と（7）のワクフ文書の形式と内容を確認したい。

まず，一般的なワクフ文書の形式は，①ワクフ設定者，②ワクフ対象，③ワクフ物件，④ワクフ条件（管財人職の条件や職務及びその継承，収益の用途など）が順に提示され，それぞれ詳しく説明された後，⑤結語（ワクフへの侵害に対する警告など）で締めくくられる，というものである[30]。第 1 章で述べたように，『ティムールのワクフ文書』では，ワクフ文書に相当する部分がⅡ（3）と（7）の二つあり，間にワクフ物件となる不動産の購入を示す売買文書が挟み込まれる，という特殊な形式になっている。（3）と（7）では，上記のワクフ文書の要件のうち，①についてはティムール，②についてはホージャ・アリーとその子孫，とそれぞれ明確に示されているものの，③のワクフ物件の説明については大きな問題がある。すなわち，（3）と（7）ともに，ティムールがⅡ（4）～（6）で購入した不動産をワクフとして設定したことが簡単に述べられているだけで，売買文書の場合と同じく，四囲の境界が一切明示されていないのである。本来，ワクフ文書でワクフ物件となる不動産を説明する場合には，必ずその土地の東西南北の境界が何に接しているかが明示されるはずであり［Subtelny 2007: 261］，この点で『ティムールのワクフ文書』はワクフ文書として大きな欠陥を有しているといえる。

さらに，他にもワクフ文書としてはありえない表現が使用されている箇所がある。文書の最終部分において，管財人職の指定と，彼らがワクフ対象であるホージャ・アリーの子孫に対して果たすべき責務についての説明の後，ワクフの侵害に対する警告として以下のような記述がある。

> スルターンたち，サイイドたち，シャイフたち，カーディーたちを含め，誰もこの前述の私有地（amlāk）に対する所有権と管財権（milkīyat va tawliyat）を主張してはならない。前述のスルターン・ホージャ・アリーの子孫とサイイド・アリー・マンスールの子孫を除いては。というのは，<u>所有権はスルターン・ホージャ・アリーとその子孫に属し</u>，管財権はサイイド・アリー・マンスールとその子孫に属しているからである。［*Ṣukūk I*: 12b; *ʿAbdī II*: 393］（下線は筆者による）

この引用文において，そもそもワクフ設定したはずの不動産のことをその後も「私有地」と呼んでいること自体誤りであるが，さらに問題となるのが下線で示した箇所である。すなわち，ワクフ設定後，ワクフ対象であるホージャ・アリーの子孫が寄進された不動産の所有権を有することになっているので

29）その一方で，しばしば売買文書の後半部分に挿入される，契約の有効性を担保する法的条項が欠如している。具体的には，「両当事者は各々等価の財物を交換した。また，法定の追奪担保責任（żamān al-darak）は私（売主）の側にある」や「〔本契約において〕過剰損害も射幸性もない（bi-lā ghabn wa lā ghurūr）」といったものである［Chekhovich 1974: 51–53; Werner 2003: 29–30］。ただし，全ての売買文書に書かれている訳ではない。

30）一般的なワクフ文書の形式については，岩武 1990 や川本 1989 が参考になる。

ある。本来ワクフとは「所有権移転の停止」を意味し，設定者が自分の所有する何らかの財の処分権を放棄し，その財から得られる用益・収益を宗教的善行と認められる目的のために恒久的に用いることを指す。そのため，本文書で記されているように，ワクフ設定された同一の不動産に対して管財権と所有権が共存することはありえないはずである[31)]。この箇所に関しては，それぞれの権利を有する二人の名前が明確に挙げられていることからも，文書を写す際の単なる書き間違いとは思えない。以上のように，『ティムールのワクフ文書』収録の「ワクフ文書」には，イスラーム法上定められたワクフの定義を無視した記述が含まれており，これを正式なワクフ文書とみなすことは到底できないのである[32)]。

さらに，『ティムールのワクフ文書』には，ワクフの維持・管理において重要な役割を果たす，管財人職の指定に関しても問題がある。Ⅱ（7）において，管財人として名が挙げられているのが，「サイイド・ジブラーイールの息子，サイイド・アリー・マンスールの息子，サイイド・ジャマール・アッディーンの息子，サイイド・アリー・マンスール」である[33)]［*Ṣukūk I*: 12b; *ʿAbdī II*: 392］。ここで最初に名前が挙げられている，「ジブラーイール」はサフィー・アッディーンの父であり，その息子である大アリー・マンスールはサフィー・アッディーンの兄弟にあたることになる。また，大アリー・マンスールとその息子，およびワクフの管財人に指定された，孫の小アリー・マンスールは，Ⅱ（1）のホージャ・アリーの系譜においてもその名が挙げられている[34)]（［図 1］参照）。

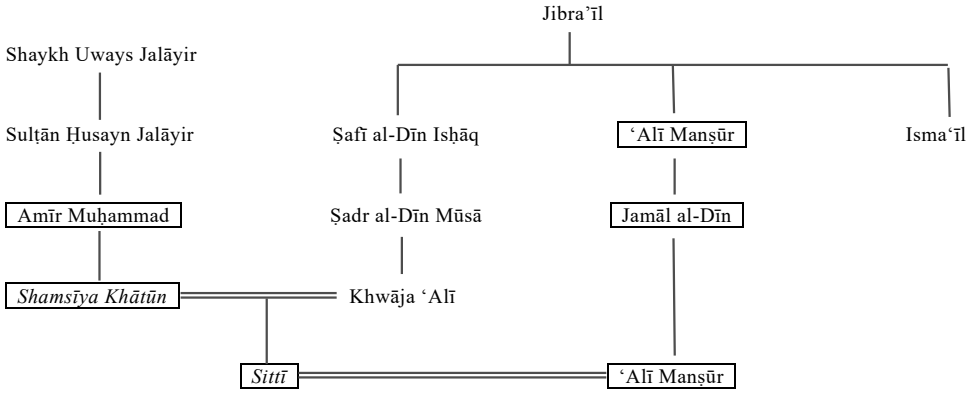
ここで問題になるのが，この三代にわたる人々がサファヴィー朝の他の史料では一切確認できないことである［Kasravī 1927: 807］。例えば，『ティムールのワクフ文書』の発見以前に編纂されたサファヴィー朝内部史料の中に，サフィー・アッディーンの兄弟が列挙

31）イスラーム法上のワクフの定義や有効要件等については，柳橋［2012: 637–666］を参照されたい。なお，ワクフ設定後の所有権の行方については，法学派によって意見が異なる。ティムール朝王族が属したハナフィー派法学では，設定者にもワクフ対象である受益者にも設定後のワクフ物件の所有権はない，とされるが，誰に属しているかについては明確な説明はない。一方，シャーフィイー派では，設定者に留まるとする説，神に属するという説とともに，受益者に属するという説もあったようだが，二つ目の説が通説であった［柳橋 2012: 657］。この文書がシャーフィイー派のカーディーの許で作成されたと仮定した場合でも，わざわざ少数の学説に基づいて記述することは考えにくい。

32）このワクフ文書が実際に作成されたものであれば，ティムール朝王族が属したハナフィー派のカーディーの許で作成された可能性が高いと考えられる。そうであれば，当時ハナフィー派では，ワクフ文書にワクフの法的拘束力を巡る疑似訴訟とそれに対する判決を示した，別の文書が添付されたはずであるが，この『ティムールのワクフ文書』には一切含まれていない。この点も，この文書の真正性を疑う理由の一つである。上記のような，ハナフィー派において作成されたワクフ文書に添付された訴状と判決を記した文書については，Isogai［2003: 5–8］や Subtelny［2007: 172–173, 259］を参照のこと。

33）なお，名前による混乱を避けるため，以降ジブラーイールの息子の方は「大アリー・マンスール」，本文書において管財人に任命された方は「小アリー・マンスール」として区別する。

34）Ⅱ（1）の系譜では，小アリー・マンスールがディズフールにある「スルターン・サイイド・アリー」の墓の傍で暮らしていることが記されている［*Ṣukūk I*: 3a; *ʿAbdī II*: 385］。また，Ⅱ（2）では，ホージャ・アリーがティムールに対して，自分が五つの場所に同時に存在することを告げる箇所がある。そこでは，その一つがディズフールであり，またその地での自身に対する呼び名が「スルターン・サイイド・アリー・スィヤーフプーシュ」であると述べている［*Ṣukūk I*: 7b; *ʿAbdī II*: 389］。以上のことから，小アリー・マンスールがその傍らで暮らしているという墓に埋葬されているのは，ホージャ・アリーということになる。ただし，その場合，『ティムールのワクフ文書』が作成された時点（1403–4）で，既にホージャ・アリーは死去していることになり，歴史的事実だけでなく，本文書の内容とも矛盾が生じてしまう［Kasravī 1927: 807］。なお，実際にホージャ・アリーが埋葬されたのは，彼が亡くなった地，イェルサレムであった［*ʿĀlam-ārā*: 16; *Ḥayātī*: 112］。



[図 1]『ティムールのワクフ文書』に基づくシャイフ・サフィー・アッディーンの家系図
※□は他の史料で言及されていない人物であることを示す。
※イタリックは女性であることを示す。

されたものがいくつかあるが，いずれも大アリー・マンスールには言及していない[35)]。さらに，1649 年以降に編纂された『サフィー家の系譜 *Silsilat al-Nasab-i Ṣafavīya*』（以下 *Silsila*）でも，サフィー・アッディーンの兄弟が列挙される箇所があるが，やはり大アリー・マンスールの名は含まれていない［*Silsila*: 16］。なお，*Silsila* では，ティムールとホージャ・アリーとの三回の邂逅について比較的詳しい記述が残されているだけでなく，ティムールによるワクフ設定に関しては『ティムールのワクフ文書』に基づいたとしか思えないような詳細な情報が含まれている［*Silsila*: 45–49］。それにもかかわらず，大アリー・マンスールの系譜や管財人の指定については一切言及されていない。以上のことから，*Silsila* では，大アリー・マンスールとその子孫に関する話題が意図的に排除されたとしか考えられない。

また，ワクフ文書では管財人の具体的な職務や俸給，継承方法など細かい規定が掲載されるのが一般的である。それに対して，『ティムールのワクフ文書』では，その職務として，収益を確保し，毎年ホージャ・アリーの子孫に届けることが挙げられているだけで，それ以外のことについては一切記述がない。

以上のように，『ティムールのワクフ文書』の記述からは，管財人に指定されたのはそもそも存在自体が疑わしい人物であり，その具体的な職務や俸給，継承方法等について文書内にほとんど記載されていないことが分かった。

これまでの検証の結果，ホルストが指摘したこと以外にも，ティムールの称号や父の名前，「ワクフ文書」としてふさわしくない表現や必要な要件を満たしていないことなど，多くの点で問題があることが明らかになった。以上のことから，『ティムールのワクフ文書』は到底正式な文書として認められるものではなく，後世の杜撰な贋作であったと言わざるをえないのである。

4. 文書偽造の背景

これまで確認してきたように，『ティムールのワクフ文書』は真正の文書ではなく，後世サファヴィー朝期に捏造されたものであっ

35）史料によって生まれた順番が異なるが，サフィー・アッディーンの兄弟としてはヤアクーブ，ラシード，ムハンマド，ユースフ，イスマーイールの 5 名，姉妹としてはサフィーヤの 1 名が挙げられている［*Ṣafvat*: 80; *Ḥayātī*: 111–113］。本文書では，上記の兄弟姉妹のうちイスマーイールにのみ言及され，サフィー・アッディーンと大アリー・マンスールと合わせて 3 人兄弟とされている。

たことは間違いない。では，なぜこの文書は偽造されたのであろうか。本章では，17 世紀初頭前後にこの文書が偽造された理由について，想定しうるいくつかの仮説を提示し，それぞれに検討を加える形でこの設問に対する答えを探っていきたい。

まず一つ目の仮説は，ワクフ文書を捏造した人物が，それを根拠として自身が管財人職を継承する立場にあると主張するため，というものである。実は，後世「ティムールのワクフ文書」と称する文書が捏造された例は，本稿で扱ったホージャ・アリーとその子孫に対するワクフ以外にも存在する。それが，ティムールが中央アジアのヤスにある，アフマド・ヤサヴィー（1166–7 没）廟に対して設定したとされるワクフ文書である。この文書は 19 世紀末に突如その存在が知られるようになったものであり，そこではアフマド・ヤサヴィーの兄弟が管財人に指定され，以降その男系男性子孫が管財人職を継承することが定められていた。しかし，後にこの文書は，19 世紀末にアフマド・ヤサヴィーの兄弟の子孫を自称していた人々が自らの管財人職の地位を主張するために偽造したものであることが明らかになった[36]。

このヤサヴィー廟に対するワクフ文書と，ホージャ・アリー及びその子孫に対するワクフ文書とを比較した場合，決定的に異なる点がある。それは，後者の文書において管財人に指定された人物に関して，彼がその文書に基づいて自らの権利を主張したという記録はどの史料にも残されていないことである。前章で述べたように，本文書で管財人に指定されているのはサフィー・アッディーンの兄弟の孫にあたるとされる小アリー・マンスールであるが，彼自身のみならず，その祖父にあたる人物，さらにはその子孫についても，その他の史料では一切確認できない。むしろ，サファヴィー朝の公式史料と比較すれば，この人物の系譜は偽りのものであったとみなさざるをえない。そのような素性の怪しい人物がこの文書を偽造し，あろうことかサフィー・アッディーンの真正な子孫であるアッバース 1 世に対して何らかの権利を主張したとは想像し難い[37]。以上のことから，管財人に指定されている人物やその子孫が『ティムールのワクフ文書』を偽造したとみなすことは困難であり，そもそも偽造された背景には別の目的があったと考えるべきである。

二つ目の仮説は，ホージャ・アリーの子孫であるアッバース 1 世が，ワクフの受益者として，ワクフに設定された不動産から上がる収益に対する権利を主張するため，というものである。しかし，前章で確認したように，そもそも文書の中でワクフ物件の四囲の境界が示されておらず，正確な場所は確定できな

36）このティムールに帰されるワクフ文書は，ロシア帝国支配下の 1897 年にアフマド・ヤサヴィーの兄弟の子孫を自称する人々がトルキスタン総督府シルダリヤ州の長官に提示したことで，初めて世に出たものである。かつては真正の文書として歴史研究においても利用されていたが，やがて後世の贋作とする説が広く認められるようになった［DeWeese 1999: 508–509; Subtelny 2007: 242］。

37）Kasravī は，管財人に指定されている小アリー・マンスールこそが『ティムールのワクフ文書』を偽造した張本人であり，サフィー家の親族の立場と，管財人として土地に対して有する権利を主張するために，自ら捏造した文書をアッバース 1 世の許に届けた，と主張した［Kasravī 1927: 807–808］。しかし，そもそもサフィー・アッディーンの孫の世代にあたる小アリー・マンスールが，アッバース 1 世の時代まで生きていたとは到底考えられない。また，小アリー・マンスール本人ではなく，彼の子孫が文書を捏造したと仮定した場合でも，文書の中で自らの利益に直結する管財人の職務や俸給について，またその地位の継承について，具体的な記述を残していないのは極めて不自然である。さらに，後述するように，アッバース 1 世はムガル朝王子への書簡で文書発見についてわざわざ説明していることからも，このワクフ文書を重視していたことは明らかである。サフィー家の親族を名乗る，素性の怪しい人物が持ち込んできたワクフ文書を，アッバース 1 世が重宝したとは考えにくい。以上のことから，この文書はサファヴィー朝政権内部で作成されたものと考えるべきであろう。

いはずである。また，17 世紀後半に編纂された *Silsila* では，ティムールによるワクフ設定とその後のワクフ物件について，以下のような記述が残されている。

> ティムール・ハーンは Talvār や Qizil Ūzān, イスファハーンとハマダーンのクーラなどから多くの村々と農地を購入し,〔それらを〕スルターン・ホージャ・アリー様の男性子孫に対するワクフに設定した。〔しかし，この〕ワクフ物件はティムールの時代,〔誰かの〕処分権下に置かれることはなかったため，耕作されなかった。〔また〕現在〔も〕シャイフ（＝サフィー・アッディーン）の子孫の処分権下にはない。さて，（中略）シャー・アッバース（中略）がバルフに遠征した時に，バルフ近郊の Khvāja Du Kūha 村でキズィルバシュの聖戦士たちがそれらの文書を入手した。それは世界の避難所たるシャーの錬金術の徴ある眼差しに届けられたが，その私有地の管理に注意が向けられることはなかった。［*Silsila*: 48］

この引用文の記述から，ティムールがワクフ設定した当時でさえ，このワクフ物件は耕作地として機能していなかったこと，さらに『ティムールのワクフ文書』が発見された後も，アッバース 1 世はワクフ物件とされた土地に対する管理を行わなかったことが，それぞれ明らかになった。つまり，このワクフ物件は，ティムールの時代からアッバース 1 世治世に至るまで，わざわざ文書を偽造してそれに対する権利を主張する必要があるような，大きな収益を生み出す土地であったとは考えられず，アッバース 1 世自身そこから収益を得ようという意図がなかったとみなすべきである。以上のことから，第二の仮説もまた成立しない。

三つ目の仮説は，アッバース 1 世の祖先とティムールとの深いつながりを示す証拠を作り出すことによって，サファヴィー朝王家の地位の向上を図るため，というものである。言い換えると，ティムールによるホージャ・アリーとその子孫に対するワクフ設定を記録した文書を偽造することによって，サファヴィー朝君主の祖先であるサファヴィー教団の教団長の威信を高め，ひいては同朝の支配権確立につなげるという狙いがあった，ということである。結論から先に述べれば，これが最も整合性がある説と考える。

では，なぜティムールをワクフ設定者とする文書を偽造することが，サファヴィー朝王家の地位の向上につながるのであろうか。そこには，アッバース 1 世が即位した当時のサファヴィー朝において，支配の正統性に大きな動揺が生じていたことが関わっていると考えられる。

15 世紀後半にサファヴィー教団の教団長に就任した，イスマーイール（後のサファヴィー朝初代君主イスマーイール 1 世：在位 1501～24）は，自ら異端的教義に基づく「救世主」であると同時に「隠れイマームの代理」として，またサファヴィー教団の「完全なる導師（murshid-i kāmil）」として，狂信的な信徒となったキジルバシュを指導し，彼らの軍事力を背景に政権の獲得に成功した［Savory 1980: 16, 23, 27］。しかし，1514 年のチャルディラーンの戦いでの敗北により，キジルバシュからの熱狂的な支持を失ったイスマーイール 1 世は，以降「救世主」や「隠れイマームの代理」といった神権的支配者の立場を放棄せざるを得なくなった。また，キジルバシュは，時を経るに従ってかつて自らの「完全なる導師」とみなしたサファヴィー朝君主に服従することをやめ，16 世紀後半にはクーデターによって君主の交代を行うようにさえなっていたのである。

こうした状況下で即位したアッバース 1 世が自らの支配者としての立場を確立するために選んだのが，自身にとっての理想的君主である，ティムールとのつながりを強調

することであった［Quinn 2000: 88–89, 91; Szuppe 1990: 325–326］。このアッバース1世の願望を実現すべく，王朝年代記の執筆者たちは，ティムールの代名詞ともいえる「吉兆なる合の持ち主（ṣāḥib-qirān）」という称号をアッバース1世に対して使用したとされている[38]［Quinn 2000: 49–50, 75］。さらに，第2章で確認したような，ティムールとサファヴィー教団の教団長との関わりを示す逸話の挿入もまた，同じ目的を果たすための方策であったと考えられる。かつてその逸話は，単に捕虜の解放が行われたことを伝えるだけのものであったが，『ティムールのワクフ文書』の偽造によって，ティムールがホージャ・アリーの弟子となり，自身の私有地をワクフに設定した，という内容へと昇華されることになったのである。アッバース1世は在世中，サファヴィー朝君主が有してきた「完全なる導師」としての立場を重視し，臣民との師弟関係を維持することを望んだとされている［Savory 1986: 8］。上述した逸話は，自身がかのティムールでさえも心酔し，師事した，サファヴィー教団の教団長の子孫であることを強調し，「完全なる導師」としての立場を取り戻すために作り出されたものであった，とみなすことができるだろう。

さらに，アッバース1世はムガル朝の王子サリーム（後のジャハーンギール：在位1605〜27）に宛てた書簡において，アンドフードでティムールのワクフ文書を発見したことを伝えただけでなく，わざわざその写しを添付している。このことから，ティムールの導師の子孫としてのサファヴィー朝君主の立場は，国内だけでなく，国外に対しても喧伝されていたことは明らかである[39]。

これまで確認してきたように，『ティムールのワクフ文書』が偽造された背景には，ティムールとアッバース1世の祖先であるサファヴィー教団の教団長との深い関わりを示す歴史的証拠を作り出し，「完全なる導師」としてのアッバース1世の支配権を確立するためであったと考えられる。文書偽造の際に重視されたのは，あくまでもティムールという英雄がサファヴィー教団の教団長に対するワクフ設定を行ったという「事実」だけであり，ワクフの維持や管財人の職務といった，本来ワクフ運営において重要な要素が顧みられることはほとんどなかったのである。

おわりに

これまでの検証の結果として，まずはホルストが指摘した通り，『ティムールのワクフ文書』はアッバース1世治世の贋作であった，ということを改めて確認することができた。また，『ティムールのワクフ文書』の中でも，特にワクフ文書に相当する箇所は文書として必要な要件を満たしていないことが判明した。さらに，ワクフ文書で管財人に指定されたのは，サフィー・アッディーンの兄弟の子孫とされながら，他の史料では一切確認できない実在不明の人物であった。以上のことから，『ティムールのワクフ文書』は実際のワクフの維持や管理に注意を払うことなく，単にティムールによってワクフ設定が行われたことの証拠となるために作成されたと

38）また，アッバース1世は，バイラカンにおいて灌漑設備を整備し，そこから得られる収益の一部をサフィー廟に対するワクフに設定しているが［*Afẕal*: 433］，これはかつてティムールが同地で行った再開発事業に倣ったものであったと考えられる［Melville 2020: 117］。さらに，アッバース1世によるバイラカンでのワクフ設定は，『ティムールのワクフ文書』発見後の1606年のことであり，これについてもティムールが行ったとされるワクフ設定に倣ったものであると考えられる。

39）この書簡はバルフ遠征直後の1603年に書かれたものとされている［Islam 1979: 144–145］。なお，このワクフ文書について説明し，その写しを添付した目的は，書簡の内容から判断する限り，ティムールの子孫であるムガル朝君主に対する，サファヴィー朝君主の優位性を主張するためではなく，むしろ両国の友好の歴史を強調するためであったようである。

みなすことができる。

以上のような文書の偽造が行われた背景としては，それによってサファヴィー朝王家の地位の向上を図るというアッバース 1 世の狙いがあったと考えられる。すなわち，ティムールが自らの祖先であるホージャ・アリーの弟子となり，ワクフを設定した，という逸話を創作し，そのもっともらしい証拠を提示するためにこの文書を捏造したのである。この文書が発見された後，サファヴィー朝年代記史料に文書の記述内容が反映されるようになったことから，文書の偽造は狙い通りの効果を上げることに成功したといえるだろう。

さらに，17 世紀後半と 18 世紀初頭にそれぞれ編纂されたサフィー廟不動産目録にこの文書の写し（*Vaqfnāmcha*）が収録された理由についても，ティムールの事績を自身の祖先，そしてその墓廟に結び付けようとしたためであったと思われる。アッバース 1 世はサフィー廟に対して多くのワクフを設定したことで知られているが，その行為を自らが作り出した「ティムールによるワクフ」と一体化させることで，自身の，またサファヴィー朝王家の威信を高めようとしたと考えられるのである。

参考文献

◉一次史料◉

Afżal: Fażlī Beg Khūzānī Iṣfahānī. *Afżal al-Tavārīkh*. jild-e 3. Ed. Kioumars Ghereghlou. Cambridge: Gibb Memorial Trust. 2015.

ʿĀlam-ārā: Iskandar Beg Turkmān. *Tārīkh-i ʿĀlam-ārā-yi ʿAbbāsī*. 2 vols. Ed. Īraj Afshār. Tehran: Kitābfurūshī-i Taʾīd, 1334–5Kh.

Ḥayātī: Qāsim Beg Ḥayātī Tabrīzī. *A Chronicle of the Early Safavids and the Reign of Shah Ismāʿīl (907–930/1501–1524)*. Ed. Kioumars Ghereghlou. New Haven: American Oriental Society. 2018.

Jahān-ārā: Qāżī Aḥmad Ghaffārī, *Tārīkh-i Jahān-ārā*. Ed. Ḥasan Naraqī. Tehran: Kitābfurūshī-i Ḥāfiẓ. 1342Kh.

Khulāṣat: Qāḍī Aḥmad Qummī. *Khulāṣat al-Tavārīkh*. 2 vols. Ed. Iḥsān Ishraqī. Tehran: Muʾassasa-ʾi Intishārāt va Chāp-i Dānishgāh-i Tihrān. 1383Kh.

Silsila: Shaykh Ḥusayn Pīrzāda Zāhidī, *Silsilat al-Nasab-i Ṣafavīya*. Belrin: Orientalischer Zeitschriftenverlag Iranschähr. 1924.

Ṣafvat: Ibn Bazzāz Ardabīlī. *Ṣafvat al-Ṣafāʾ*. Ed. Ghulām-Riżā Ṭabāṭabāʾī Majd. Tehran: Intishārāt-i Zaryāb. 1376Kh.

Ṣukūk: *Ṣukūk va Sijillāt-i Tīmūrī*.

Ṣukūk I: Mashhad, Kitābkhāna-ʾi Āstān-i Quds-i Riżavī, Ms. 4141: 1b–13a.

Ṣukūk II: Tehran, Kitābkhāna-ʾi Markazī-i Dānishgāh-i Tihrān, Ms. 1477-1: 2b–12a.

Ṣukūk III: Tehran. Kitābkhāna-ʾi Millī-i Malik, Ms. 678-1.

Takfīr: Sayyid Muṭahhar b. ʿAbd al-Raḥmān b. ʿAlī. *Risāla-ʾi Takfīr-i Qizilbāsh*. In: Jaʿfariyān 1397Kh: 691–742.

Vaqfnāmcha: *Vaqfnāmcha-ʾi Ṣāḥib-qirān-i Amīr Tīmūr Gūrakān*.

ʿAbdī II: ʿAbdī Beg Shīrāzī. *Ṣarīḥ al-Milk*. Tehran, Mūza-ʾi Millī-i Īrān, Ms. 3719: 385–393.

ʿAbdī III: ʿAbdī Beg Shīrāzī. *Ṣarīḥ al-Milk*. Tehran, Kitābkhāna va Asnād-i Millī-i Īrān, Ms. 2734: 374–390.

Kitābcha Khulāṣa I: Tehran, Kitābkhāna, Mūza va Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī, Ms. 17228: 46b–52a.

Kitābcha-ʾi Khulāṣa II: Tehran, Kitābkhāna va Asnād-i Millī-i Īrān, Ms. 7866: 4b–11a.

Ẓafar-nāma: Sharaf al-Dīn ʿAlī Yazdī. *Ẓafar-nāma*. 2 vols. Eds. Sayyid Saʿīd Mīr Muḥammad Ṣādiq and ʿAbd al-Ḥusayn Navāʾī. Tehran: Kitābkhāna, Mūza va Markaz-i Asnād-i Majlis-i Shūrā-yi Islāmī. 1387Kh.

◉研究文献◉

Chekhovich, Olga Dmitrievna. 1974. *Samarkandskie dokumenty XV-XVI vv.: O vladeniyakh Khodzhi Aḥrāra v Srednei Azii i Afganistane*. Moscow: Nauka.

Delbarī, Shahrbānū. 1397Kh/2018. “Bar-rasī va Bāz-khvānī-i Sanad-i Vaqfī-i *Ṣukūk va Sijillāt-i Tīmūrī*.” *Payām-i Bahāristān* 113: 261–292.

DeWeese, Devin. 1999. “The Politics of Sacred Lineages in 19th-century Central Asia: Descent Groups Linked to Khwaja Ahmad Yasavi in Shrine Documents and Genealogical Charters.” *International Journal of Middle East Studies* 31(4): 507–530.

Horst, Heribert. 1958. *Tīmūr und Ḫōǧā ʿAlī: Ein Beitrag zur Geschichte der Ṣafawiden*. Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur.

Horst, Heribert. 1985. "ʿAlī, K̲ʷāja." *Encyclopaedia Iranica* (Ehsan Yarshater, ed.), vol. 1, 836, New York: Bibliotheca Persica Press.

Islam, Riazul. 1979. *A Calendar of Documents on Indo-Persian Relations (1500–1750)*. 2 vols. Karachi: Institute of Central & West Asian Studies. 1979–1980.

Isogai, Ken'ichi. 2003. "A Commentary on the Closing Formula Found in the Central Asian Waqf Documents." *Persian Documents: Social History of Iran and Turan in the Fifteenth-Nineteenth Centuries* (Nobuaki Kondo, ed.), 3–12, London, New York Routledge.

Jaʿfariyān, Rasūl. 1397Kh/2018–9. "Tārīkh-i Qizilbāshiyān-i Ṣafavī dar Matn-i ʿArabī." *Maqālāt va Risālāt-i Tārīkhī, Daftar-i panjum: Bīst va Nuh Maqāla va Risala-ʾi Tārīkhī* (Rasūl Jaʿfariyān, ed.), 663–742, Tehran: Nashr-i ʿIlm.

Kasravī, Aḥmad. 1306Kh/1927. "Bāz-ham Ṣafavīya." *Āyanda* 2(11): 801–812.

Manz, Beatrice Forbes. 1989. *The Rise and Rule of Tamerlane*. New York: Cambridge University Press.

Melville, Charles. 2020. "Shah ʿAbbas's Patronage of the Dynastic Shrine at Ardabil." *Muqarnas* 37: 111–138.

Morimoto, Kazuo. 2010. "The Earliest ʿAlid Genealogy for the Safavids: New Evidence for the Pre-dynastic Claim to Sayyid Status." *Iranian Studies* 3(4): 447–469.

Quinn, Sholeh A. 2000. *Historical Writing during the Reign of Shah ʿAbbas: Ideology, Imitation and Legitimacy in Safavid Chronicles*. Salt Lake City: The University of Utah Press.

Savory, Roger. 1986. "ʿAbbās I." *Encyclopaedia of Islam, second edition* vol. 1 (Hamilton Alexander Rosskeen Gibb et al. eds.), 7–8, Leiden: Brill.

Savory, Roger. 1980. *Iran under the Safavids*. Cambridge: Cambridge University Press.

Subtelny, Maria Eva. 2007. *Timurids in Transition: Turko-Persian Politics and Acculturation in Medieval Iran*. Leiden, Boston: Brill.

Szuppe, Maria. 1997. "L'évolution de l'image de Timour et des Timourides dans l'historiographie Safavide du XVIe au XVIII siècle." *Cahiers d'Asie Centrale* 3(4): 313–331.

Werner, Christoph. 2003. "Formal Aspects of Qajar Deeds of Sale." *Persian Documents* (Nobuaki Kondo, ed.), 13–49.

Woods, John E. 1990. *The Timurid Dynasty*. Bloomington, Ind.: Indiana University, Research Institute for Inner Asian Studies.

岩武昭男　1990 「ティムール朝アミールのワクフの一事例―ヤズドにおけるチャクマーク・シャーミーのワクフについて―」『西南アジア研究』32: 56–80.

川本正知　1989 「ホージャ・アフラールのワクフ文書」『人文学報』63: 53–68.

デイヴィッド・ブロー　2012 （角敦子訳）『アッバース大王―現代イランの基礎を築いた苛烈なるシャー―』中央公論新社.

羽田亨一　1989 「"Ross Anonymous" の名で知られるシャー・イスマアイル 1 世の伝記の制作時期について」『東洋史研究』43(3): 108–129.

間野英二　2001 『バーブル・ナーマの研究Ⅳ研究篇―バーブルとその時代―』松香堂.

柳橋博之　2012 『イスラーム財産法』東京大学出版会.

付録：『ティムールのワクフ文書』校訂

〈略号〉

Ṣukūk va Sijillāt-i Tīmūrī（*Ṣukūk*）

آقر: (*Ṣukūk I*) Mashhad, Kitābkhāna-ʾi Āstān-i Quds-i Riżavī, Ms. 4141: 1b–13a.

دت: (*Ṣukūk II*) Tehran, Kitābkhāna-ʾi Markazī-i Dānishgāh-i Tihrān, Ms. 1477-1: 2b–12a.

Vaqfnāmcha-ʾi Ṣāḥib-qirān-i Amīr Tīmūr Gūrakān（*Vaqfnāmcha*）

مم: (*ʿAbdī II*) *Ṣarīḥ al-Milk*. Tehran, Mūza-ʾi Millī-i Īrān, Ms. 3719: 385–393/images 199–203.

کم: (*ʿAbdī III*) *Ṣarīḥ al-Milk*. Tehran, Kitābkhāna va Asnād-i Millī-i Īrān, Ms. 2734: 374–390/images 374–390.

دلبری: Delbarī, Shahrbānū. 1397Kh/2018. “Bar-rasī va Bāz-khvānī-i Sanad-i Vaqfī-i *Ṣukūk va Sijillāt-i Tīmūrī*.” *Payām-i Bahāristān* 113: 261–292.

〈凡例〉

- I「文書発見後に付け加えられた序文」に関しては，*Ṣukūk* と *Vaqfnāmcha* では内容も分量も異なる。そのため，それぞれを I-1 および I-2 として個別に提示する。なお，I-1 の *Ṣukūk* については *Ṣukūk I* を底本とし，*Ṣukūk II* との照合を行い，異同がある場合には注で示した。また，I-2 の *Vaqfnāmcha* では *ʿAbdī II* を底本とし，*ʿAbdī III* との照合を行い，異同がある場合には注で示した。
- II 以下は，基本的に *Ṣukūk* と *Vaqfnāmcha* の内容そのものは共通している。そのため，*Ṣukūk I* を底本とし，*Ṣukūk II*，*ʿAbdī II* 及び *III* との照合を行い，異同がある場合には注で示した。
- 底本である *Ṣukūk I* に記述がない，あるいは誤りと判断できるような語句や文章が書かれていて，他の三つの写本の記述に従って加筆・訂正した方が適切と判断できる場合には，テキストでは他の三つの写本に記された語句や文章を［］の中に補って示した。なお，*Ṣukūk I* の該当箇所に誤りと判断できるような語句や文章が書かれている場合は，注で示した。
- テキストは，基本的に現代ペルシア語の標準的正書法に基づく。写本では前置詞や動詞の接頭辞，動詞 būdan の現在形 3 人称単数形などが他の単語とつなげてかかれている場合も，本テキストでは原則として分かち書きとした。ただし，ペルシア語の前置詞 ba については，写本では必ず次の単語と連結されており，文章の書き方からもアラビア語の前置詞 bi- と区別なく使用されているとみなしうることが多い。そのため，前置詞 ba については，例外的に分かち書きせず，次の単語と連結した綴りのままにした。
- クルアーンからの引用は（）で示し，その直後に［］の中に該当する章数と節数を挙げた。
- 本文書に含まれる問題が明らかになるよう，全ての写本でアラビア語の文法的な誤りが共通してみられる場合には，訂正せずにそのままにした。
- Delbarī の校訂テキストにおいて，単語の選択の誤りや綴りの間違い，文章の欠落が確認できるものについては，該当する箇所に注を付した。注では，Delbarī の校訂テキストに対して دلبری を略号として用いて，その後に校訂テキストの該当するページ数，それぞれの誤りや間違い等を示した。

Ⅰ．文書発見後に付け加えられた序文（本文書の来歴）

Ⅰ-1. *Ṣukūk*

(آقر: ۱پ؛ دت: ۲پ)

سبحان من تحیّر فی ذاته سواه　　فهم خرد بکنه کمالش نبرده راه

از ما قیاس ساحت قدسش بود چنانکه　　موری کند مساحت گردون ز قعر چاه

لطایف سپاس و شرایف محامد بی‌قیاس که ذکر ذاکران و ورد سجّاده‌نشینان مرکز خاک و تهلیل مهلّلان و تسبیح مسبّحان عالم پاک است، سزاوار خالقی است که هر[1] شئ را چنانکه باید و شاید مخلوق ساخته و دل عارفان آزاده و کاملان قدم در دایره مهر دنیا ننهاده را[2] از بیم دوزخ و امید بهشت پرداخته، عمّ احسانه و تمّ امتنانه و صلات صلوات نامیّات و تحف تحیّات زاکیات بر مشهد مقدّس و مرقد اقدس پیغمبری که دایم آفتاب جهان‌تاب هدایت از مشرق عاطفت و مطلع رافت او طلوع نموده، نور حدقهٔ وجود شفیع یوم الموعود خلاصهٔ انجم و افلاک، <بیت>

محمّد سرو باغ ما عرفناک　　شهنشاه سریر ملک لو لاک

تحیّت بی‌حدّ و احصاء و محمّدت بی‌عدّ و انتهاء بر آل صاحب کمال (دت: ۳ر) همایون‌خصال او انسب و اصوب است، خصوصا مصباح لو کشف الغطاء و مفتاح کنوز انا مدینة العلم و علی بابها، وارث مرتبهٔ هرونی طوطی شیرین‌گفتار سلونی (آقر: ۲ر) مظهر اسرار[3] هل اتی مظهر انوار لا فتی، وصی حضرت خیر البشر امیر المؤمنین حیدر علی ابن ابی طالب __علیه الصلوة و السلام__ <نظم>

مسند شرع مبین را بعد خیر المرسلین　　جز علی و یازده فرزند نبود جانشین

امّا بعد، بعزّ عرض اصحاب دانش و بینش که خلاصهٔ کارخانهٔ آفرینشند، می‌رساند که عرض از ترقیم این کلمات و تمنیق این مقالات آن است که در شهور سنهٔ احدی عشر و الف من الهجرة النبوّیة __علیه السلام و التحیّة__ نوّاب کامیاب سپهرکاب ظفرانتساب خاک آستانهٔ خیر البشر __صلّی اللّه علیه و آله و سلم__ غلام باخلاص امیر المؤمنین حیدر علی بن ابی طالب __علیه الصلوة و السلام__ رواج دهندهٔ مذهب حقّ ائمّهٔ اثنی عشر __سلام اللّه علیهم اجمعین__ <بیت>

پادشاه عادل و ظل اله　　سیّد عالی‌نسب عباس شاه

صفوی الموسوی الحسینی بهادر خان __خلّد اللّه تعالی ملکه ابدا__ با عساکر نصرت‌انتساب سفر بجانب ولایت بلخ فرموده بودند غالبا از عالم غیب بلا ریب سبب همین بوده که چون قلعهٔ انده‌خود شبرغان که عمدهٔ قلاع آن دیار است، بدستیاری قدرت پروردگار غازیان نصرت‌شعار شبانروزی مفتوح گردانند و وقفنامهٔ نامی بعضی املاک که ابو البقاء رضوان اللّه علیه صاحب قران اعظم سلطان تیمور گورکان[4] __انار اللّه برهانه__ بواسطهٔ کرامتی چند که از سلطان الاولیاء و برهان الاتقیاء[5] سلطان سیّد

---

[1] در دلبری ۲۷۴ «هر» افتاده است.

[2] در دلبری ۲۷۴ «را» افتاده است.

[3] دلبری ۲۷۵: اسار.

[4] دلبری ۲۷۶: ورکان.

[5] در دلبری ۲۷۶ «و برهان الاتقیاء» افتاده است.

خواجه علی (آقر: ۲پ) __قدّس سرّه__ مشاهده نموده (دت ۱۴۴۷: ۳پ) بود، بشرحی که در وقفنامه مسطور است، بعضی املاک دویست و پنج سال قبل از این وقف اولاد کرام و امجاد عظام صفیّهٔ صفویّه کرده، بدست آمد که موجب ازدیاد اعتقاد و اخلاص مریدان این سلسلهٔ ولایت‌نشان باشد[۶].

I -2. *Vaqfnāmcha*

(مم: ۳۸۵؛ کم: ۳۷۴)

<صورت وقفنامچهٔ صاحب قران امیر گورکان>

در شهور سنهٔ احدی عشر و الف نوّاب سپهرکاب ظفرانتساب خاک آستانهٔ علی بن ابی طالب، شاه عباس صفوی الموسوی الحسینی بجانب بلخ فرموده بودند. چون قلعهٔ اندخود شبرغان که عمدهٔ قلاع آن ولایت است، مفتوح گردید، این وقفنامچه در میان درختی مخزون بود بچنگ در آمد. گویا[۷] علّت غائی آن حرکت[۸] همین بوده است.

II（1）文書の序文とホージャ・アリーの系譜

(آقر: ۲پ؛ دت: ۳پ؛ مم: ۳۸۵؛ کم: ۳۷۴)

هو الغنی[۹]

بسم اللّه الرحمن الرحیم[۱۰]

موضـــــــــع	آل تـــمـــغـــا	موضـــــــــع	موضـــــــــع
اللّه محمّد علی		مهر	مهر
راستی رستی			
العبد تیمور			

سپاس بی‌قیاس حضرت حقّ را __جلّت عظمته و علّت کلمته__ که خورشید ازل از مشرق لم یزل قلوب قابل و نفوس کامل دوستان خود فایز و لامع گردانید[۱۱] و فیض آن را در ظهور تجلّی تجلاّء جمالی[۱۲] که سبب هدایت عالم و عالمیان است، بر

---

[۶] در دت بعد از «باشد»، «نقل وقفنامهٔ مذکور اینست» نوشته شده است.

[۷] کم: کوییا.

[۸] کم: علّت غائی و باعث آن حرکت.

[۹] در دت و مم و کم نیست.

[۱۰] در دت نیست.

[۱۱] مم و کم: طالع و لامع گردانیده.

[۱۲] دت: بر جمالی.

عرصهٔ ابدال و اوتاد منبسط گشت تا حقایق و معانی[13] از آن اشارات و عبارات[14] بر گزیدگان جناب احدیّت[15] از مکمن قابلیّت بمعدن خاصیّت ﴿ذلک فضل اللّه یؤتیه من یشاء و اللّه ذو الفضل العظیم﴾[ق ۶۲: ۴] [16] (آقر: ۳ر) و صلوات نا محدود و درود نا معدود بر ارواح[17] مطهّرعاقبت محمود[18] باد که واسطهٔ جمیع کمالات مکارم اخلاق از حضرت خلّاق من حقیقت اطلاق[19] الی (دت: ۴ر) یوم التلاق[20] وجود مبارک او بود __علیه من الصلوات ازکیها و من التحیات ازهاها__ و بر آل و اولاد مطهّر او باد اجمعین و الحمد للّه ربّ العالمین: محمّد المصطفی و علی المرتضی و الحسن و الحسین __علیهم السلام__ نسله امام زین العابدین __ علیه الصلوة و السلام[21]__ (کم: ۳۷۵) نسله امام محمّد الباقر __ علیه الصلوة و السلام[22]__ نسله امام جعفر الصادق __ علیه الصلوة و السلام[23]__ نسله امام موسی الکاظم __ علیه الصلوة و السلام[24]__ نسله امامزاده بحقّ و هادی مطلق ابو القاسم حمزه __صلوات علیه__ نسله سیّد قاسم نسله سیّد احمد اعرابی[25] نسله سیّد محمّد نسله سیّد عوض الخواصّ نسله سیّد محمّد نسله سیّد جعفر نسله سیّد ابراهیم نسله سیّد محمّد نسله سیّد حسین نسله سیّد محمّد [نسله] سیّد شرفشاه سلیمان[26] نسله سیّد فیروزشاه زرّین‌کلاه[27] نسله سیّد اسمعیل نسله سیّد محمّد[28] نسله سیّد قطب الدین نسله سیّد صلاح الدین الرشید[29] نسله سیّد صالح نسله سیّد جبرئیل نسله سیّد اسحق مشهور بشیخ صفی الدین، اخوانه[30] سیّد علی منصور[31] و سیّد اسمعیل[32]، نسله[33] سیّد جمال الدین[34] (آقر: ۳پ) نسله سیّد علی منصور ساکنه فی[35] دزفول المجاور فی روضة مقدّسة [36] سلطان سیّد علی، نسله سیّد صدر الدین موسی نسله سلطان العارفین و برهان المساکین[37] سیّد خواجه علی[38].

II（2）ホージャ・アリーとティムールの逸話

سیّد سلطان سیّد فیروزشاه زرّین‌کلاه؛ کم: ...سیّد حسین نسله سیّد شرفشاه نسله سیّد سلطان نسله سیّد فیروزشاه زرّین‌کلاه.

[28] دت: سیّد محمّد بن اسمعیل.

[29] دت و مم و کم: سیّد صلاح الدین رشید.

[30] دت و مم و کم: نسله.

[31] مم و کم: سیّد صالح منصور.

[32] دت: ... سیّد علی منصور نسله و سیّد اسمعیل.

[33] دت: اخوانه.

[34] دلبری ۲۷۷: جمالدین.

[35] در دت «فی» نیست.

[36] مم و کم: ... المجاور نسله سلطان سیّد علی...

[37] مم و کم: السالکین.

[38] دت: ... سیّد علی منصور ساکنه دزفول نسله سلطان سیّد علی در روضهٔ مقدّسه سیّد صدر الدین موسی نسله سیّد خواجه علی نسله سلطان العارص خواجه علی نسله سیّد علی.

[13] مم و کم: حقایق معانی.

[14] کم: عبارت.

[15] مم و کم: جناب عزّت احدیّت را.

[16] در مم و کم بعد از این آیت، «رساند» نوشته شده است.

[17] کم: روح.

[18] مم و کم: محمودی.

[19] مم و کم: من حیث الاطلاق.

[20] مم و کم: یوم التنّاد.

[21] مم و کم: علیه السلم.

[22] مم و کم: علیه السلم.

[23] مم و کم: علیه السلم.

[24] مم و کم: علیه السلم.

[25] مم و کم: محمّد اعرابی.

[26] در دت «سلیمان» نیست.

[27] مم: ... سیّد حسین نسله سیّد محمّد نسله سیّد شرفشاه نسله

موضـــــــــع موضـــــــــع موضـــــــــع موضـــــــــع

مهر مهر مهر مهر

چـــهـــار عـــلـــی آل تـــمـــغـــا موضـــــــــع

مهر (دت: ۴پ)

امّا بعد بر خوانندگان این حروف پوشیده و مخفی نماند که چون حضرت خاقان[۳۹] الاعظم المعظّم و مولی ملوک العرب و العجم و قهرمان الماء و الطین، ظلّ اللّه فی الارضین و ناصر و منصور بعون ربّ العالمین و عون[۴۰] الاسلام و المسلمین، بندهٔ خاندان آل یس، تیمور شاه ابن امیر جهانگیر مشهور جغط[۴۱] یعرف[۴۲] شبرقانی خروج نمود و از ملک ترکستان متوجّه بجانب خراسان و عراق[۴۳] و فارس و آذربایجان و عربستان و روم شده، چون بآب عمو رسید، تازیانهٔ او[۴۴] از دست او در آب[۴۵] عمو افتاده و غمگین (کم: ۳۷۶) و پریشان شده و بخاطر خود گذرانید (مم: ۳۸۶) که از آنجا باز گردد که ناگاه درویشی جنده پوشیده[۴۶] در میان آب عمو حاضر شده و نعره‌ای بر تیمور خان[۴۷] زده، گفت (آقر: ۴ر) که یا تیمور مترس. و دست مبارک در ته آب عمو کرده، تازیانهٔ تیمور را بدر آورده، بدست وی داد چرا که تازیانهٔ تیمور را از بلور صافی تراشیده و دانهای گرانمایه بدانجا نشانیده و مرصّع نموده[۴۸]. چون بدینمنوال بوده، در ته آب فرو رفته، چون تیمور خان این کرامت از آن مرد حقّ بدیده، از او سؤال کرده که ای درویش بحقّ خدا که نام خود و مقام خود بما[۴۹] بگوی. آن شخص[۵۰] گفت که نام من[۵۱] علی است و مقام من در چند جا می‌باشد[۵۲] و یک مقام در اردبیل گویند و دیگر را دزفول گویند و مقام دیگر را قدس خلیل گویند و دیگر مقامها بسیارند[۵۳]، امّا تو مرا در مقام اردبیل و مقام دزفول[۵۴] خواهی دید[۵۵]. این بگفت و از چشم تیمور خان غایب شد و چون تیمور خان[۵۶] این رموز بدید، دل قوی کرد و متوجّه بجانب خراسان و عراق و آذربایجان و روم و عربستان شده و از آنجا متوجّه فارس شده.

چون فتح خراسان (دت: ۵ر) و عراق و فارس میسّر شد[۵۷] و شاه منصور بن مظفّر حاکم فارس را با برادران[۵۸] بقتل

---

[۳۹] در کم «حضرت» نیست.

[۴۰] مم و کم: غوث.

[۴۱] مم و کم: جغطی.

[۴۲] دت: بعرف.

[۴۳] کم: بجانب عراق و خراسان.

[۴۴] مم و کم: تازیانه.

[۴۵] کم: بآب.

[۴۶] دت: ژنده‌پوش؛ مم و کم: ژنده‌پوشی.

[۴۷] در مم و کم «خان» نیست.

[۴۸] دت: نشانده و مرصع نموده؛ مم: نشانده؛ کم: نشانده بودند.

[۴۹] کم: بمن.

[۵۰] دت: آن شخصش؛ در کم «آن شخص» نیست.

[۵۱] در مم و کم «من» نیست.

[۵۲] مم و کم: جا است.

[۵۳] مم و کم: یک مقام در اردبیل و دیگری در دزفول و دیگری در قدس خلیل و دیگر مقام بسیار است.

[۵۴] مم و کم: در اردبیل و دزفول.

[۵۵] دت: دیدن.

[۵۶] در دت «تیمور خان» نیست.

[۵۷] دلبری ۲۷۸: متوجّه بجانب خراسان و عراق و فارس میسر شده (یعنی، «خراسان و عراق و آذربایجان و روم و عربستان شده و از آنجا متوجّه فارس شده چون فتح» افتاده است).

[۵۸] مم و کم: برادران و اقوام.

رسانیده، متوجّه دزفول و شوشتر شده، چون[۵۹] در سر پل دزفول[۶۰] رسیده، اسب تیمور خان بر پل گذر نمی‌کرده و تیمور خان را عجب آمده، حکایت آب عمو و تازیانه با یادش[۶۱] آمد. از ملک دزفول که شمس دهدارش[۶۲] نام بود، طلب نموده و[۶۳] سؤال نمود که یا[۶۴] شمس[۶۵] در این شهر شما درویشی جنده پوشیده[۶۶] که علی نام داشته باشد، هست یا نه. شمس دهدار (آقر: ۴پ) جواب داد که پادشاه سلامت باشد. آن چنان درویشی جنده‌پوش[۶۷] که علی نام داشته باشد، (کم: ۳۷۷) نیست الاّ[۶۸] یک سیّدی[۶۹] هست که هفت نوبت بمکّهٔ اللّه مبارک[۷۰] رفته و حجّ گزارده و اکنون آمده و دوازده اربعین در[۷۱] ما بین قلعهٔ دلشاد و قلعهٔ دهده رزین[۷۲] بر آورده و می‌گوید که من پسر شیخ صدر الدین موسی بن شیخ صفی الدین اسحق بن سیّد جبرئیل اردبیلی‌ام[۷۳] و تاج سیاه بر سر دارد و می‌گوید که من عزاء امام حسین[۷۴] می‌دارم. چون تیمور خان این شنید، از اسب فرود آمد و بر سر پل ایستاده و فرموده که درویش جنده‌پوش[۷۵] را طلب کنید. شمس دهدار در حال دوید و گفت که یا درویش پادشاه شما را طلب می‌کند[۷۶]. حضرت سلطان سیّد علی باتّفاق بابا رکن الدین ولی[۷۷] بر خواستند و متوجّه بجانب تیمور خان شدند و حضرت سیّد خواجه علی[۷۸] دو آجر در دست گرفته و حضرت سیّد بابا رکن الدین ولی یک آجر در دست گرفته[۷۹]. چون در نزد[۸۰] تیمور خان رسیدند و بابا رکن الدین ولی آن[۸۱] آجری که در دست داشته، بر تیمور خان زده و من بعد[۸۲] حضرت سلطان سیّد خواجه علی (دت: ۵پ) یک آجر بر تیمور خان زده، تیمور خان گفته که یک آجر دیگر بزن مرا. حضرت سلطان سیّد خواجه علی یک آجر دیگرش زده، تیمور خان گفته که یکی دیگر بزن مرا. حضرت سیّد خواجه علی[۸۳] فرمود که حرف مزن. بس است ترا سه گوشهٔ عالم[۸۴] بتو داده‌ایم. طمع زیاده مکن[۸۵] که نیک نیست و (آقر: ۵ر) شتاب کن و متوجّه شام باش و بازخواست خون حضرت ائمّهٔ معصومین[۸۶] بکن[۸۷] که ما تاج سیاه بجهت عزاء ائمّهٔ معصومین[۸۸] پوشیده‌ایم. و چون تیمور خان

---

[۵۹] در کم «چون» نیست.

[۶۰] مم و کم: بسر پل دزفول.

[۶۱] مم و کم: بیادش.

[۶۲] کم: شمس الدین دهدارش.

[۶۳] در مم و کم «طلب نموده و» نیست.

[۶۴] دلبری ۲۷۸: ای.

[۶۵] کم: شمس الدین.

[۶۶] دت و مم: ژنده پوشیده؛ کم: ژنده‌پوشی.

[۶۷] دت و مم و کم: ژنده‌پوش.

[۶۸] کم: امّا.

[۶۹] در مم و کم «یک» نیست.

[۷۰] در مم و کم «مبارک» نیست.

[۷۱] در مم و کم «در» نیست.

[۷۲] دت: دید زرّین.

[۷۳] در دلبری ۲۷۸ «ام» افتاده است.

[۷۴] در مم و کم بعد از «امام حسین»، «علیه السلام» نوشته شده است.

[۷۵] دت: چنده‌پوش.

[۷۶] مم و کم: فرمود که طلب کنید.

[۷۷] کم: بابا رکن ولی.

[۷۸] دت: حضرت سلطان سیّد خواجه علی.

[۷۹] مم و کم: باتفاق بابا رکن الدین ولی دو آجر در دست سلطان سیّد خواجه علی و یک آجر در دست بابا رکن الدین ولی.

[۸۰] مم و کم: بنزد.

[۸۱] در دت «آن» نیست.

[۸۲] در کم «من بعد» نیست.

[۸۳] دت: حضرت سلطان سیّد خواجه.

[۸۴] دت: عالم را.

[۸۵] مم و کم: ترا سه گوشه عالم دادیم بست طمع زیاد مکن.

[۸۶] مم و کم: حضرت ائمّهٔ معصومین __علیهم السلام __.

[۸۷] کم: کن.

[۸۸] مم و کم: حضرت ائمّهٔ معصومین __علیهم السلام __.

این رموز بدید، گفت ای شخص بحرمت خدای تعالی که تو سرّ خود با ما بگوی که تو کیستی و نام تو چیست و مقام تو کجاست. حضرت سلطان سیّد[۸۹] خواجه علی فرمود که نام من[۹۰] علی است و پدرم[۹۱] سیّد صدر الدین موسی است و باباء[۹۲] من سلطان[۹۳] شیخ صفی الدین است. تو زود باش و برو که تا بازخواست خون ائمّهٔ معصومین[۹۴] (کم: ۳۷۸) بکنی (مم: ۳۸۷) و دیگر وعدهٔ دیدار اردبیل[۹۵] خواهد بود و نشانهٔ پیالهٔ زهر در میانهٔ[۹۶] ما و تو باشد بدستوری که تازیانه از بیخ[۹۷] آب عمو بدر آوردم و بدست تو دادم.

چون تیمور خان این[۹۸] رموز بشنوده، انگشت تعجّب بدندان تحیّر گزیده[۹۹] و دیگر سؤال نکرده[۱۰۰] و متوجّه بجانب روم شده مملکت روم و عربستان فتح کرده و مسخّر ساخت و در شام[۱۰۱] رفته بازخواست خون ائمّهٔ معصومین[۱۰۲] نموده و کسیب فوق الحدّ بر داشته، متوجّه آذربایجان عجم شده، چون ببلدهٔ نعش که سراب گویند، آمده، از اولاد هرون بن امام موسی کاظم[۱۰۳] سیّد نامدار سیّد محمّد نام رموزی[۱۰۴] بدو نموده، وی را محبّ شد و بعضی از املاک آنجا بر آن سیّد وقف نموده و از آنجا متوجّه اردبیل شده زهری[۱۰۵] اختیار کرده و بدست سلطان خواجه علی داده سلطان خواجه علی پیالهٔ زهر را (آقر: ۵پ) ستانده و[۱۰۶] نوشیده و این مصرع خواند[۱۰۷] که ماییم سرپوش ماییم زهرنوش. (دت: ۶ر) الاّ اللّه الاّ اللّه لا اله الاّ اللّه الاّ اللّه لا اله الاّ اللّه دوست الاّ اللّه[۱۰۸]. چون این ذکر[۱۰۹] بقال ما[۱۱۰] صوفیان صادق الاخلاص ادا نمودند، حضرت سلطان خواجه علی را وجدی و حالی پیدا شده و تا وقتی که آن زهر از اندام مبارک[۱۱۱] او بدر آمده و بر جامهٔ او چسبان شده، چون تیمور خان این حالت بدید، از حالی بحالی گردید و دست در دامن حضرت سلطان خواجه علی پیچیده، مرید و معتقد سلطان خواجه علی شده، اسیران روم را جمله بدو بخشید و شرح این حکایت بسیار است امّا در قباله از این بیشتر نوشتن نتوان[۱۱۲] تا خواننده را ملالة نرسد.

چون تیمور خان این عجایب و غرایب از سلطان (کم: ۳۷۹) خواجه علی بدید، از او پرسید که یا سلطان سیّد خواجه علی این چند مقام را چرا[ا] اختیار کرده‌ای. آن حضرت فرموده که یک شب حضرت خواجهٔ کاینات و مهتر موجودات محمّد

---

[۸۹] در دلبری ۲۷۹ «سیّد» افتاده است.

[۹۰] در دت «من» نیست.

[۹۱] دت و مم و کم: پدر من.

[۹۲] مم و کم: بابای.

[۹۳] در دلبری ۲۷۹ «سلطان» افتاده است.

[۹۴] مم و کم: ائمّهٔ معصومین ــعلیهم السلام ــ.

[۹۵] مم و کم: در اردبیل.

[۹۶] کم: میان.

[۹۷] دلبری ۲۷۹: پنج.

[۹۸] در دت «این» نیست.

[۹۹] مم و کم: انگشت تحیّر بدندان تعجّب گزیده.

[۱۰۰] در کم «نکرده» نیست.

[۱۰۱] کم: بشام.

[۱۰۲] مم و کم: ائمّهٔ معصومین ــعلیهم السلام ــ.

[۱۰۳] مم و کم: هرون بن امام موسی کاظم ــعلیه السلامــ.

[۱۰۴] دلبری ۲۷۹: رموز.

[۱۰۵] دت و مم و کم: پیالهٔزهری.

[۱۰۶] مم: ستاده؛ کم: گرفته گرفته.

[۱۰۷] دت: خوانده ‹مصرع›.

[۱۰۸] دت: الاّ اللّه لا اله الاّ اللّه الاّ اللّه لا اله الاّ اللّه دوست الاّ اللّه؛ مم و کم: الاّ اللّه الاّ اللّه لا اله الاّ اللّه لا اله الاّ اللّه دوست الاّ اللّه.

[۱۰۹] مم: این ذکر را؛ کم: ذکر را.

[۱۱۰] کم: باتّفاق.

[۱۱۱] در دلبری ۲۸۰ «مبارک» افتاده است.

[۱۱۲] کم: نتوان نوشتن.

المصطفی ــصلّی اللّه علیه و آله و سلم[113]ــ را در خواب دیدم که فرمود یا علی من ترا فرزند خود دانسته‌ام و مقام مدفون تو[114] قدس خلیل و شام است[115] که فردای قیامت حساب حشر و نشر[116] در آن مقام خواهد بود و من می‌خواهم که تو در آن مقام باشی که بعضی از عاصیان گناه‌کار امّت من خدای تعالی بتو[117] خواهد بخشید[118] انشاء اللّه تعالی. بدین دلیل مرا سلطان خواجه علی خوانند[119](آقر: ۶ر) و مقام دزفول را دلیل آن است که یک شب حضرت امام محمّد تقی ــعلیه السلمــ را در خواب دیدم که مرا در کنار گرفت و گفت ای علی ثانی من[120] مردم دزفول ملحد شده‌اند و بر خدای تعالی عاصی‌اند. برو که ترا فرمان دادم که ایشان را از راه ضلالت براه هدایت دلالت کنی. چون اشارهٔ امام شده، ما از بغداد متوجّه دزفول شدیم و دوازده اربعین در ما بین [قلعهٔ دلشاد و] قلعهٔ دنده رزین[121] (دت: ۶پ) بطریق اولیاء کامل بر آورده و دزفولیان را براه هدایت دلالت نموده و ایشان را از دلالت من بازیچه می‌آمده تا زمانی که حضرت امام محمّد تقی ــع[122]ــ بعالم ولایت اجازت داده، بفضل حقّ سبحانه و تعالی یازده شبانروز رودخانهٔ دزفول را بند نمودم تا وقتی که ملحدان دزفول راه هدایت اختیار کردند، دلیل آن است که در مملکت دزفول مرا سلطان سیّد خواجه[123] علی سیاه‌پوش گویند و دختر امیر محمّد بن سلطان حسین، حارسیّه شمسیّه خاتون را که از برای من نذر آورده‌اند[124] و من وی را بنکاح محمّدی برای خود عقد بسته‌ام. مرا از آن [زن] یک دختری حاصل شده و آن دختر ستّی[125] را گزیده (کم: ۳۸۰) نام نهادم (مم: ۳۸۸) و آن دختر را من از برای سیّد علی منصور بن سیّد جمال الدین بن علی منصور[126] بن سیّد جبرئیل که این عمّ‌زادهٔ خود است، نکاح بسته و اللّه اعلم و مقام[127] دزفول را بر ایشان رجوع نمودم و مقام اردبیل را دلیل آن است که چون جدّ بزرگوارم (آقر: ۶پ) سیّد فیروزشاه زرّین‌کلاه از ملک عربستان نزول در ملک عجم کرده و دوازده سال در مملکت فارس پادشاهی نموده و آخر الامر حضرت امیر المؤمنین علی ــعلیه الصلوة و السلام[128] ــدر واقعه بدو[129] نموده که یا سیّد فیروزشاه فرزند خود سیّد اسمعیل را بگوی که متوجّه آذربایجان شود که در آن مملکت ولایتی هست که اردبیل گویند و در ولایت اردبیل دهی است که آن را کلاه‌رود گویند، در آن ده مقام ساز و ساکن شو و[130] چون سیّد فیروزشاه این رموز بدید، ترک تخت و سلطنت دنیا بکلّی بگفت[131] و بسر سیستان جهرم[132] خلوت کرد و عبادت کرد[133] و ساکن شد و مدفون[134] او آنجا است و در آن دیار مشهور است بحبیب الدین شیر حبیب بجهت

---

[113] در مم و کم «سلم» نیست.

[114] مم و کم: مقام و مدفن تو.

[115] دت و مم و کم: باشد.

[116] کم: فردای حساب و حشر و نشر.

[117] مم: بر تو.

[118] کم: بعضی از عاصیان امّت مرا خدایتعالی بتو خواهد بخشید.

[119] مم و کم: مرا سلطان خواجه خواند.

[120] در مم و کم «من» نیست.

[121] دت: دنده زرّین.

[122] در دت «ع» نیست.

[123] در دت «خواجه» نیست.

[124] مم و کم: آوردند.

[125] دلبری ۲۸۱: سنی.

[126] مم و کم: ... علی بن منصور.

[127] مم و کم: مقام اوّل.

[128] مم و کم: امیر المؤمنین ــعلیه السلامــ.

[129] دت: بد.

[130] دت: مقام سازد و ساکن شود.

[131] کم: تخت و سلطنت را باز گذاشته، ترک دنیا بکلّی بگفت.

[132] دلبری ۲۸۱: جهر به.

[133] مم و کم: عبادت نمود و خلوت کرده.

[134] مم و کم: مدفن.

آنکه هر شب جمعه شیران[۱۳۵] بطواف قبّهٔ (دت: ۷ر) مبارک او آیند و چون سیّد اسمعیل متوجّه مملکت آذربایجان شده، در راه زنجان مردم واضحین سیّد اسمعیل را بضرب تیر شهید کردند که لعنت بر ایشان باد و من بعد مردم رحمت‌آباد طوالش[۱۳۶] بر سبیل سودا در ابهر آمده[۱۳۷] و محفّهٔ سیّد اسمعیل را از سیّد محمّد فرزند او در خواست نمودند و صندوق تعبیه[۱۳۸] ساختند و در بار استران[۱۳۹] کردند بجهت دوستی خاندان رسول اللّه __صلّی اللّه علیه و آله و سلّم[۱۴۰]__ بردند و در حوالی ورزنه ذرّه[۱۴۱] کوه دهی هست که آن را لاوطه گویند و در محرابی[۱۴۲] لاوطهٔ مزبوره[۱۴۳] پشته‌ای است که آن پشته را[۱۴۴] (کم: ۳۸۱) قم دشت گویند و مرقد مبارک (آقر: ۷ر) امامزاده بحقّ و هادی مطلق ابو القاسم حمزه بن امام موسی کاظم __علیه الصلوة و السلام[۱۴۵]__ و محمّد علوی که مشهور است بهاشم بن محمّد حنیفه، در سر همان پشته مدفونند در یک گنبد. چون سیّد اسمعیل را در آن حوالی رسانیدند، شب در خواب کیا محمّد بن کیا حسن آمده که مرا در سر این پشتهٔ لاوطه در پهلوی جدّ بزرگوار من[۱۴۶] ابو القاسم حمزه بن امام موسی کاظم __علیه الصلوة و السلام[۱۴۷]__ مدفون سازند[۱۴۸] که خدای تعالی از شما راضی باشد. چون ایشان این رموز بدیدند، سیّد اسمعیل بن فیروز شاه زرّین‌کلاه را در سر پشتهٔ[۱۴۹] قم دشت ذیل ذرّه کوه[۱۵۰] بمحرابی[۱۵۱] قریهٔ لاوطه[۱۵۲] پهلوی امامزاده ابو القاسم حمزه بن امام موسی کاظم __علیه الصلوة و السلام[۱۵۳]__ مدفون سازند[۱۵۴] __نوّر اللّه مرقدهم[۱۵۵]__ و من بعد سیّد محمّد خود متوجّه اردبیل شده و در قریهٔ کلاه‌رود ساکن شده و از او سیّد قطب الدین پیدا شده و از او سیّد صلاح الدین رشید پیدا شده و از او سیّد صالح[۱۵۶] پیدا شده و از او سیّد جبرئیل پیدا [شده][۱۵۷] [و از او سلطان العارفین و برهان السالکین شیخ صفی الدین (دت: ۷پ) اسحق و سیّد علی منصور و سیّد اسمعیل پیدا شدند][۱۵۸] و از شیخ صفی الدین اسحق، حضرت سلطان خواجه[۱۵۹] صدر الدین موسی پیدا شده و از خواجه شیخ صدر الدین موسی این فقیر حقیر ذرّهٔ [بی‌مقدار][۱۶۰] پیدا شده و[۱۶۱] حضرت امیر المؤمنین و امام المتّقین علی بن ابی طالب __علیه الصلوة و السلم[۱۶۲]__ در

---

[۱۳۵] دت: شیر.

[۱۳۶] کم: جلابش؛ دلبری ۲۸۱: طالش.

[۱۳۷] کم: مردم رحمت‌آباد جلابش بر سبیل سودا بدانجا آمده.

[۱۳۸] دلبری ۲۸۱: نفیسه.

[۱۳۹] کم: شتران.

[۱۴۰] مم: رسول __صلّی اللّه علیه و آله__ ؛ کم: رسول خدا __صلّی اللّه علیه و آله__.

[۱۴۱] دت: زر.

[۱۴۲] مم و کم: محراب.

[۱۴۳] دلبری ۲۸۱: مذبوره.

[۱۴۴] دلبری ۲۸۱: آن را پشته.

[۱۴۵] مم و کم: علیه السلام.

[۱۴۶] دت و مم و کم: بزرگوارم.

[۱۴۷] دت: صلّی اللّه علیه و آله و سلم؛ مم و کم: علیه السلام.

[۱۴۸] مم و کم: سازید.

[۱۴۹] مم و کم: بپشتهٔ.

[۱۵۰] مم و کم: ذیل ورزنه کوه.

[۱۵۱] مم و کم: محراب.

[۱۵۲] دلبری ۲۸۲: بمحرابی در قریه لاوطه.

[۱۵۳] مم و کم: علیه السلام.

[۱۵۴] دت و مم و کم: نمودند.

[۱۵۵] دت: مرقده.

[۱۵۶] در مم از «متوجّه اردبیل» تا «سیّد صالح» در حاشیه نوشته است. در کم عباراتی که در حاشیهٔ مم نوشته شده است، نیست.

[۱۵۷] آقر: شدند.

[۱۵۸] در آقر این عبارت نیست.

[۱۵۹] مم و کم: حضرت خواجه شیخ.

[۱۶۰] آقر: مقدار.

[۱۶۱] دلبری ۲۸۲: شدهو.

[۱۶۲] دت و مم و کم: علیه السلام.

واقعه بلکه بظاهر بعالم[۱۶۳] ولایت‌کشف خود جامهٔ مبارک خود بر من پوشانیده و در گنجینهٔ اسرار خود بر من گشاده و از آن گنجینهٔ اسرار علمهای بی‌شمار[۱۶۴] داده.

یا تیمور خان (آقر: ۷پ) بدان و آگاه باش که حضرت امیر المؤمنین علی ــعلیه الصلوت و السلام[۱۶۵]ــ مرا خبر داده است که من بعد عقب بچهار پشت[۱۶۶] شخصی از اولاد من خروج کند و بر بعضی ممالک پادشاه شود و دیگر فرزندی از آن شخص پیدا شود[۱۶۷] و عالم‌گیر شود (کم: ۳۸۲) و پادشاهی او[۱۶۸] مستدام باشد[۱۶۹] تا وقت خروج هادی[۱۷۰]. یا تیمور خان بدان و آگاه (مم: ۳۸۹) باش که اسم آن شخص می‌توان گفتن[۱۷۱] فامّا[۱۷۲] خارجیان در اردبیل بسیارند و پای چراغ تاریک است[۱۷۳]. یا تیمور خان بدان و آگاه باش که بولایت امیر المؤمنین علی ــعلیه الصلوة و السلام[۱۷۴]ــ مرا از تجربه و کرامات هیچ کم نیست بمنّة اللّه تعالی. یا تیمور خان بدان و آگاه باش که مرا بظاهر حال پنج مقام معلوم است[۱۷۵]: اوّل قدس خلیل الرحمن دوّم شهربان بغداد سیّوم لرستان در سر کوه آب خاینده جان گویند[۱۷۶] چهارم در شهر دزفول پنجم اردبیل. در قدس مبارک[۱۷۷] مرا سیّد عجم گویند[۱۷۸] و در شهربان بغداد مرا سلطان سیّد علی گویند و در لرستان سیّد علی ابدال گویند، در شهر دزفول سلطان سیّد علی سیاه‌پوش گویند و شاه رودبند نیز گویند و در اردبیل خواجه علی گویند[۱۷۹]. یا تیمور خان بدان و آگاه باش که مرا بواجبی صادقان لرستان شناخته‌اند و از لرستان پریورزی[۱۸۰] (دت: ۸ر) و بختیاری و عقیلی و بندانی و جوانگی و کوه‌گیلویه هفت هزار خانه بما محبّ و مرید شده و دست بیعت گرفته چون قوم کوشکی و رکرک و استرک و تونی[۱۸۱] و طبنونی و کمار و مهدماکان و ویزاوند[۱۸۲] و اورک و جوانگی[۱۸۳] و غیرهم و اللّه اعلم.

فضّة و لکنّه رجل من ولدی اسمه اسم نبی یرحل الی تبریز باثنی عشر الف فارس معصب بعصابة حمراء راکباً علی بغلة شهباء فاذا سمعتم به و ادرکه احد(؟) فی زمانه فاتوه و انصروه و لو حبواً علی الثلج.

[۱۶۳] مم و کم: عالم.

[۱۶۴] مم و کم: بسیار.

[۱۶۵] در مم و کم «علیه الصلوت و السلام» نیست.

[۱۶۶] کم: عقب چهار پشت.

[۱۶۷] در دلبری ۲۸۲ عبارت از «از اولاد من» تا «از آن شخص» افتاده است.

[۱۶۸] دت: آن.

[۱۶۹] مم و کم: دیگر فرزندان آن شخص پیدا شوند و عالم‌گیر گردند و پادشاهی ایشان مستدام باشد.

[۱۷۰] کم: وقت خروج مهدی هادی.

[۱۷۱] مم و کم: گفت.

[۱۷۲] کم: و امّا.

[۱۷۳] در مم از «فامّا» تا «است» نیست و در حاشیهٔ مم عبارات عربی زیر نوشته شده است: قال امیر المؤمنین علی بن ابی طالب ــعلیه السلامــ قال لنا فی اردبیل کنز لیس من ذهب و لا من

[۱۷۴] مم و کم: علیه السلام.

[۱۷۵] در مم و کم «معلوم» نیست.

[۱۷۶] در مم وکم «گویند» نیست.

[۱۷۷] مم و کم: در قدس خلیل.

[۱۷۸] در مم و کم «گویند» نیست.

[۱۷۹] در مم و کم «گویند» نیست.

[۱۸۰] دت: پربوزری؛ مم و کم: پرنوروی.

[۱۸۱] دت: طونی.

[۱۸۲] دلبری ۲۸۳: نیراوند.

[۱۸۳] مم و کم: جانگی.

II（3）ワクフ文書①

بر خوانندگان این حروف پوشیده و مخفی نماند که (آقر: ۸ر) چون[۱۸۴] حضرت مولی ملوک العرب و العجم و زینت الامراء فی العالم، کاشف المعانی، بانی المعالی[۱۸۵]، اعدل السلاطین فی الآفاق، مخدّر[۱۸۶] المناصب بالاستحقاق، مؤسّس قواعد العدل و الاحسان، فوایض انواع الجود علی الانسان، المقصد ارباب الحاجات، المطلب اصحاب المهمّات، الممدوح باکرم المدح و احسن الصفات، المظفّر الدنیاء و الدین تیمور خان[۱۸۷] پادشاه[۱۸۸] __خلّد اللّه ملکه و سلطانه و افاض (کم: ۳۸۳) علی العالمین برّه و احسانه__ این حکایات المعانی الآیات[۱۸۹] از لفظ درربار گوهرنثار حضرت قطب الاولیاء و برهان الاتقیاء، موسی طور المناجات و السالک السلوک عبادات[۱۹۰] و شاهباز[۱۹۱] قلعهٔ کوه معارفات و زاهد پاک‌دین مستجاب الدعوات، السلطان سیّد خواجه علی ابن شیخ صدر الدین موسی ابن شیخ صفی الدین اسحق ابن سیّد جبرئیل الحسینی بشنید، دست ارادت بدامن سعادت ابدی و دولت سرمدی خاندان محمّد و علی __ علیهم الصلوت و السلام[۱۹۲] __ خصوصاً بظاهر حال بدامن سلطان خواجه علی پیچیده و در کشتی نوح نشسته و از غم طوفان گروهان هالک در صفّ ناجی نجات یافته و این بعضی املاک که در ذیل ذکر کرده[۱۹۳] می‌شود، از مالکان املاک مزبوره بزر حلال خود خریده و بذکور اولاد وقف حضرت سلطان خواجه علی نمود و این شرح را بجهت آن در این سند ثبت فرموده که چون بعد الیوم سلاطین عصر و حاکمان شرع الشریعت[۱۹۴] و سادات (دت: ۸پ) ذوی الاحترام که از اولاد سلطان (آقر: ۸پ) خواجه علی[۱۹۵] نباشند و مشایخان کرام و قضات اسلام و اعلی و ادنی از خواصّ و عوامّ از تاریخ ذیل تا هزار سال من بعد الایّام این سند را بمطالعهٔ ایشان رسانند[۱۹۶] یا شنیدها بدیشان شنوانند، چون شنیده باشند و خوانند و دانند، باید[۱۹۷] که روی خود را از متابعت خیر و احسان صاحب خیران نگردانند. چون موضعی یا قریه‌ای یا مزرعه‌ای یا قطعه‌ای[۱۹۸] یا باغی یا طاحونه‌ای از جوی تا حبّه‌ای [۱۹۹] از موقوفات ذیل یومی از ایّام احدی از آحاد بغیر حقّ دانسته یا ندانسته[۲۰۰] اجداد و جدّات متصرّف شده و بدو رسیده و یا آنکه خود از دیگری خریده و یا بزور گرفته و یا بایر شکافته و تصرّف کرده و چون بمضمون وارسند یا شنوند ویا خود خوانند و دانند و بحیلهٔ شرعی نپوشانند[۲۰۱]، (مم: ۳۹۰؛ کم: ۳۸۴) وقف را وقفی[۲۰۲] دانسته، حقّ بمرکز[۲۰۳] خود قرار داده، باز گردانند و حقّ و سعی مرا در حقّ سلطان خواجه علی و اولاد کرام او ضایع

---

[۱۸۴] در مم و کم «چون» نیست.

[۱۸۵] مم و کم: المبانی.

[۱۸۶] مم و کم: محدّد.

[۱۸۷] دت: شاه.

[۱۸۸] دت: تیمور شاه پادشاه.

[۱۸۹] در مم و کم «المعانی الآیات» نیست.

[۱۹۰] مم و کم: العبادات.

[۱۹۱] دت: شاهانه.

[۱۹۲] دت: صلّی اللّه علیه و آله و سلم؛ مم و کم: علیهما السلم.

[۱۹۳] در دت «کرده» نیست.

[۱۹۴] دت: شرع بالشریعت.

[۱۹۵] در دت «علی» نیست؛ در حاشیهٔ مم این «خواجه علی» از قلم دیگر نوشته شده است.

[۱۹۶] کم: ... و سادات ذوی الاحترام از تاریخ ذیل تا هزار سال این سند را بمطالعهٔ آنکه از اولاد سلطانی نباشد، رسانند.

[۱۹۷] دت: ... دانند و باید.

[۱۹۸] مم و کم: قطعهٔ زمینی.

[۱۹۹] مم و کم: طاحونه‌ای یا جوی.

[۲۰۰] کم: نا دانسته.

[۲۰۱] کم: بپوشانند.

[۲۰۲] مم و کم: وقف.

[۲۰۳] دت: حق را بمرکز؛ مم و کم: حق را در مرکز.

نگردانند که ﴿انّ اللّه لا یضیع اجر المحسنین[۲۰۴]﴾ [ق ۱۱: ۱۱۵].

نعوذ باللّه چون سلاطین عصر و حاکم شرع و سادات ذوی الاحترام و قضات اسلام و مشایخ کرام خوانده و دانسته و شنیده و بمضمون رسیده که احدی از آحاد بدین صفات که ذکر کرده[۲۰۵] شده، دخل غیر خقّ بموقوفات ذیل نموده و حقّ [و] سعی مرا در حقّ سلطان خواجه علی بی‌هوده فرموده، سلاطین عصر و حاکم شرع و مستوفیان زمان[۲۰۶] بزور خود و رشوة الدنیا[۲۰۷] و حیلهٔ شرعی موقوف دارند و دفع الوقت کنند و فریفتهٔ دنیا (آقر: ۹ر) شده، امداد ننمایند و سعی مرا در حقّ سلطان خواجه علی و اولاد کرام او بی‌هوده فرمایند، فردا در عرصات قیامت از عهدهٔ امور خودشان بیرون نیامده، خجل و شرمسار باشند، بلعنت[۲۰۸] خدای و سخط رسول ــ صلّی اللّه علیه و آله و سلم[۲۰۹]ــ و بخون امام حسن و امام حسین ــعلیهما السلام[۲۱۰]ــ گرفتار باشند و اللّه اعلم بالصواب[۲۱۱]. (دت: ۹ر)

II（4）売買文書①

موضـــــــــع　　موضـــــــــع　　آل تـــمـــغـــا

اللّه محمّد علی　　مهر

راستی رستی

العبد تیمور

چـــهـــار عـــلـــی　　موضـــــــــع　　موضـــــــــع　　موضـــــــــع

مهر سر　　مهر　　مهر

بند

امّا بعد، سبب تحریر و ذکر این کلمات شرعی‌شعار آن است که حضرت مفخر القبایل و العشایر و هما[۲۱۲] امیر بلاله بن امیر پایدار[۲۱۳] و امیر خسرو شاه بن امیر عمر و امیر رستم بن امیر حسن و امیر الیاس بن امیر محمود و امیر محمّد بن امیر احمد و امیر زنگی شاه و امیر تاج الدین بن قتلوغ یعرف[۲۱۴] کردکویران، و ثانی: امیر مارغ بیک بن تاتار بیک و امیر محمود بیک بن علی بیک و امیر یونس بیک بن سلغر بیک و امیر علی شیر بیک (کم: ۳۸۵) بن ارغونی بیک مشهور باولاد مارغ بیک تاتار،

---

[۲۰۴] در دت «اجر المحسنین» نیست.

[۲۰۵] در دلبری ۲۸۴ «کرده» افتاده است.

[۲۰۶] دت: الزمان.

[۲۰۷] مم و کم: رشوة.

[۲۰۸] مم و کم: بر لعنت.

[۲۰۹] مم و کم: صلّی اللّه علیه و آله.

[۲۱۰] در دت و مم و کم «علیهما السلام» نیست.

[۲۱۱] دت: و اللّه اعلم؛ مم و کم: ... و الیه المرجع و المآب.

[۲۱۲] در مم و کم «و هما» نیست.

[۲۱۳] مم و کم: نامدار؛ دلبری ۲۸۴: ایدار.

[۲۱۴] در کم «یعرف» نیست.

و ثالث: کدخدایان مخترم، قاید حسین بن جلال الدین و قاید خوشنام بن قاید رجب شاه و قاید شعبان بن قاید احمد و قاید تاج الدین (آقر: ۹پ) بن قاید سیف الدین و قاید حیدر بن [قاید][۲۱۵] سهم الدین[۲۱۶] یعرف لر خوشنامی[۲۱۷]، و رابع: قاید حسن بن قاید حسین[۲۱۸] و قاید سلیمان شاه بن قاید محمّد و قاید اختیار بن قاید خداداد و قاید حمزه بن قاید کرد امیر[۲۱۹] یعرف لر ویزاوند، و الخامس: کدخدا یعقوب بن کدخدا ملک و کدخدا قنبر بن کدخدا شرف الدین بن کدخدا اسمعیل[۲۲۰] یعرف سغریچی، در اجلاس حضرت ملوک العرب و العجم و پادشاه اعظم المعظّم، نوشیروان ثانی و مزیّن بدین محمّدی ــصلّی اللّه علیه و آله و سلّم[۲۲۱]ــ حاضر آمدند و اقرار کردند و اعتراف شرعی نمودند بی‌ظلمی و ستمی و اکراهی که بر ایشان (دت: ۹پ) بوده باشد، بصحّت تن و کمال عقل و رضاء و رغبت خودشان که بفروختیم مبلغ املاک ذیل را از مواضع تلوار و قزیل اوزان و قوهرت و خسروآباد و اوزون درّه مشهور بطولقطو و شهرک و غازی قوشجی و قره تپره و[۲۲۲] بیجار و عله کوز و شوراب و تنیه من اعمال زرّین‌کمر عن کورهٔ همدان واقع بعراق عجم مع التوابع و اللواحق من الارض و العمارة و القناة و النهر و الکهوف و الجبال و کلّ حقّ ما یتعلّق بهما علی مبادی الوجود[۲۲۳] کلّها و الاسباب.

ببیع شرعی[۲۲۴] بفروختند آنچه از مزارع فوق المسطور در ذیل صحیفه ثبت شود با حدّ و حدود اربعهٔ معیّنه از آبدانه و بایره از زمین و عمارت و کاریز و جوی[۲۲۵] و کوه و رود و شجر آب[۲۲۶] و زنبورجای و گذار[۲۲۷] الصید کوهی از وحشی و طیور و جایگاه طاحونه و موضع (آقر: ۱۰ر) باغات (کم: ۳۸۶) و آبی و دیمی و رودخانه و سیلاب باران و صیدگاه (مم: ۳۹۱) ماهی[۲۲۸].

از ایشان بخرید حضرت مولی الملوک العرب العجم و خاقان الاعظم المعظّم، بانی خیر و احسان، بمبلغ خمسمائة و خمسین تومان[۲۲۹] که عبارت است از پانصد و پنجاه تومان که نصفهٔ[۲۳۰] آن باشد دویست و هفتاد و پنج تومان زر حمراء الخالص[۲۳۱] المضروب المسکوک کپکی.

و مالکان مذکور و مشتری مذکور [۲۳۲] از همدیگر راضی و متراضی شدند و مزارعات مزبوره را تسلیم [مشتری مذکور][۲۳۳]

---

[۲۱۵] آقر: قاسم.

[۲۱۶] مم و کم: و قاید سهم الدین.

[۲۱۷] مم و کم: بلر خوشنامی.

[۲۱۸] دت و مم و کم: قاید حسین بن قاید حسن.

[۲۱۹] مم و کم: و قاید حمزه بن قاید کرد و امیر.

[۲۲۰] دت: و کدخدا قنبر بن کدخدا شرف الدین کدخدا اسمعیل؛ مم: و کدخدا قنبری و کدخدا شرف الدین بن کدخدا اسمعیل؛ کم: و کدخدا قبری بن کدخدا شرف الدین بن کدخدا اسمعیل.

[۲۲۱] مم و کم: صلّی اللّه علیه و آله.

[۲۲۲] در دت «و» نیست.

[۲۲۳] مم و کم: علی مبادی الاسلام.

[۲۲۴] دلبری ۲۸۶: به بیع وشری.

[۲۲۵] مم و کم: کاریز جوی.

[۲۲۶] مم و کم: و شجرات.

[۲۲۷] دلبری ۲۸۶: کذا و.

[۲۲۸] دلبری ۲۸۶: ماهیان.

[۲۲۹] دت: خمسماه تومان و خمسین تومان؛ مم و کم: خمسمائة و خمسون تومان.

[۲۳۰] مم و کم: نصف.

[۲۳۱] دت و مم: زر حمراء خالص و زر فضّ الخالص؛ کم: زر حمراء الخالص و زر فضّ الخالص.

[۲۳۲] در دت بعد از «مذکور»، «و» هست؛ در مم و کم «و مشتری مذکور» نیست.

[۲۳۳] آقر: مشتری مشتری مذکور.

__ابّد اللّه سعادتهم[234]__ نمودند و حقّ ملک طلق و مال محض او دانستند و جلس[235] فی المجلس[236] الشرع صدر الحاکم العادل المرفّع __دام ظلّه__ فی[237] محضر جمع من العدول و المقیم باعترافهما و ذلک مشروح فی الحجج المجلّة المکتوبة[238] له بذلک و اتصل أتصح[239] جمیع[240] ذلک[241] حکم المولی الحاکم العادل المرفّع[242] __دام ظلّه__ و ذلک جری[243] فی شهور سنة ستّ و ثمانمائة من الهجریّة النبویّة[244]. (دت: ۱۰ر)

مزرعـــــــــــــــه	مزرعـــــــــــــــه	مزرعـــــــــــــــه	مزرعـــــــــــــــه
خسروآباد مع ما یتعلّق	قوهرت مع ما یتعلّق	تلوار مع تعلّقات	اوزن در مشهور طولقوطو[245] مع تعلّقات
پنج دانگ	پنج دانگ	پنج دانگ	شش دانگ بالتمام

مزرعـــــــــــــــه	مزرعـــــــــــــــه	مزرعـــــــــــــــه	مزرعـــــــــــــــه
غازی قوشجی مع تعلّقات	شهرک مع تعلّقات	شوراب[246]	کمره تپره[247] مع تعلّقات
پنج دانگ	پنج دانگ	پنج دانگ	پنج دانگ

مزرعـــــــــــــــه (آقر: ۱۰پ)	مزرعـــــــــــــــه	مزرعـــــــــــــــه
تنیه	بیجار مع تعلّقات	عله کوز
پنج دانگ	پنج دانگ	پنج دانگ

II（5）売買文書②

موضـــــــــــع	آل تـــمـــغـــا	موضـــــــــــع
مهر		اللّه محمّد علی
		راستی رستی

است.

[234] دت: ابدا سعادتهم؛ مم و کم: ابّد سعادتهم.

[235] دت و مم و کم: جلوس.

[236] مم و کم: مجلس.

[237] دت و مم و کم: و.

[238] کم: فی الحجّ و المجلّة المکتوبة.

[239] مم و کم: بصحّ.

[240] در کم «جمیع» نیست.

[241] در دلبری ۲۸۶ عبارت از «مشروح» تا همین «ذلک» افتاده

[242] مم: المرافع.

[243] در کم «جری» نیست.

[244] در مم و کم «من الهجریة النبویّة» نیست.

[245] مم و کم: اوزون دره مشهور بطولقطو.

[246] دت: شوراب بیخدا.

[247] دت و مم: قره تپره؛ در کم این مزرعه نیست.

العبد تیمور

موضـــــــــع چـــهـــار عـــلـــی موضـــــــــع

مهر مهر

اقرّ و اعترف الصدر الملک العرب و العجم[۲۴۸]، اتابک الاعظم المعظّم، تاج الدولة و الدنیاء و الدین اتابک سنقر بیک و اتابک جعفر بیک ابن النتیجة [۲۴۹] السلاطین کیانی، اتابک محمّد بن اتابک منصور بن محمّد بن منصور بن اتابک محمّد ماضی که بفروختیم شش دانگ تمام و کمال قریهٔ ده که واقع است بولایت اصفهان که مشهور و معروف بده وعلوی مع مزروعات و کوه و رود و ما یتعلّق بها، و دو دانگ قریهٔ خمایین که واقع است بولایت کمره عن کورهٔ اصفهان، و چهار دانگ وادغآباد که واقع است بولایت همدان مع جمیع المزروعات و کوه و رود و ما یتعلّق بها[۲۵۰]، (کم: ۳۸۷) بخدمت حضرت ملوک العرب و العجم و خاقان (دت: ۱۰پ) الاعظم المعظّم بمبلغ صد تومان که نصفهٔ[۲۵۱] آن باشد (آقر: ۱۱ر) پنجاه تومان زر خالص مضروب مسکوک کپکی.

بخرید[۲۵۲] از ایشان حضرت پادشاه معظم باقرار سلاطین‌زادهای مذکور شرعیاً قیوماً اعتراف الشرع الدین المستقیم مختاراً من غیر اکراه و اجبار[۲۵۳] علیه ان[۲۵۴] سهما شش دانگ قریهٔ ده که واقع است بولایت اصفهان که مشهور و معروف است بده وعلوی[۲۵۵] و دو دانگ قریهٔ خمایین که واقع است بولایت کمره عن[۲۵۶] کورهٔ اصفهان و چهار دانگ وادغآباد که واقع است بولایت همدان و قیمت تمام و کمال بمالکان مذکور رسانید و املاک مزبوره را بتصرّف خود گرفته.

ان باعه بالحق و لا حق له فیه قلیلاً و کثیراً و لا دعوی علی نفسه بذلک العدول و کل ما[۲۵۷] [اتصل][۲۵۸] بجمیع ما ذکر و سطر من [مفتتح][۲۵۹] الکتاب الی محکمة الحکم الحاکم[۲۶۰] من حکام المسلمین والی[۲۶۱] من ولاة المؤمنین و هو الذی ثبت عنده الملکیّة و الوکالة و هو الحاکم المسجّل ــاعزّ اللّه من والاه و [اذلّ من عاداه][۲۶۲]ــ و قضی المشروعیة حکماً جزماً و مکّن[۲۶۳] المشتری من التصرّف فی المبیع و قرّره فی یده تمکینا حکما جاریا و تقریرا[۲۶۴] شرعیّا لازما و ذلک فی شهور سنة ستّ

---

[۲۴۸] مم و کم: العبد مولی الملک العرب و العجم.

[۲۴۹] مم و کم: ابنی نتیجة.

[۲۵۰] در دلبری ۲۸۶ عبارت از «ودو دانگ» تا همین «ما یتعلق بها» افتاده است.

[۲۵۱] مم و کم: نصف.

[۲۵۲] در آقر بالای «بخرید»، «و» نوشته شده است.

[۲۵۳] دت: اکراها و اجبارا.

[۲۵۴] دلبری ۲۸۷: آن.

[۲۵۵] دت: بده علوی.

[۲۵۶] دلبری ۲۸۷: از.

[۲۵۷] در دت و مم و کم «ما» نیست.

[۲۵۸] آقر: التصل.

[۲۵۹] آقر و دت: مفتح.

[۲۶۰] کم: الی محکمه و مختمه الحکم الحاکم.

[۲۶۱] مم و کم: ... المسلمین و والی.

[۲۶۲] آقر: عاد من عاداه.

[۲۶۳] دلبری ۲۸۷: کمن.

[۲۶۴] دت: تقریر؛ دلبری ۲۸۷: تقدیرا.

و ثمانمائة[۲۶۵].

بولایت اصفهان قریهٔ ده	بولایت کمره قریهٔ خمایین (مم: ۳۹۲)	بولایت همدان قریهٔ وادغآباد
شش دانگ تمام و کمال[۲۶۶]	دو دانگ	چهار دانگ

II（6）売買文書③

موضـــــــــع	آل تـــمـــغـــا	چـــهـــار عـــلـــی	موضـــــــــع
الله محمّد علی			مهر که در
راستی رستی			سر بند است
العبد تیمور			

موضـــــــــع	موضـــــــــع	
مهر	مهر	(آقر: ۱۱پ؛ دت: ۱۱ر)

اقرار کردند و اعتراف شرعی نمودند و هما کیازادهای معظّم مکرّم المسمّی: کیا محمّد و کیا حسن و کیا بیله‌زور و کیا کته‌زور ولدان کیا علی کیا[۲۶۷] ابن کیا محمّد بن منکلی بن محمّد[۲۶۸] معروف (کم: ۳۸۸) اصفهانی، ساکنه[۲۶۹] در طوالش رحمت‌آبادی من اعمال کوهدم جیلان، و کدخدایان معزّز محترم: کدخدا حسن و اخوان کدخدا محمّد و کدخدا کیا ملک و کدخدا شیر ملک و کدخدا علی کیا و کدخدا علاء الدین مشهور معروف بیورج[۲۷۰] طوالش رحمت‌آبادی که بفروختیم بحضرت مولی الملوک العرب و العجم و زینة الملوک فی العالم، خاقان الاعظم المعظّم، همگی و جملگی بیست و چهار زیوار قریهٔ سورزنه و قریهٔ لاوطه مع قم دشت و نهر ارود که واقعند بولایت طارم سفلی در بطن ذره کوه بناحیهٔ [بلدیه] ، بمبلغ صد هزار دینار زر[۲۷۱] مسکوک جاری الممالک[۲۷۲] که نصفهٔ آن [باشد] پنجاه هزار دینار زر خالص مضروب مسکوک جاری الممالک[۲۷۳].

و مشتری مذکور __ابّد الله سعادتهم[۲۷۴]__ بمالکان مذکور رسانید باقرار مالکان مزکوره اقرارا شرعیا قیوما [شرعیة][۲۷۵] الدین المستقیم مختارا من غیر اکراها[۲۷۶] علیه ان سهما جمیع بیست و چهار زیوار قریهٔ سورزنه مع نهر ارود و قریهٔ لاوطه مع

---

[۲۶۵] دلبری ۲۸۷: ست ثمانمائه.

[۲۶۶] مم و کم: تمام.

[۲۶۷] مم و کم: و کیا کیسه‌زور ولدان کیا علی؛ دلبری ۲۸۷: کیا بیله‌زور ولدان کیا علی.

[۲۶۸] در کم «محمّد» نیست.

[۲۶۹] مم و کم: ساکن.

[۲۷۰] مم: بهورح؛ کم: بتورح.

[۲۷۱] در مم و کم «زر» نیست.

[۲۷۲] دت و مم و کم: ممالک.

[۲۷۳] مم: نصف آن پنجاه هزار دینار باشد زر خالص مضروب مسکوک جاری ممالک؛ کم: نصف آن پنجاه هزار دینار باشد زر خالص مسکوک جاری ممالک.

[۲۷۴] دت: ابدا سعادتهم؛ مم و کم: ابّد سعادتهم.

[۲۷۵] آقر: شرعة.

[۲۷۶] مم و کم: اکراه.

قم دشت. و مشتری و مالکان مذکور از هم راضی شدند و قیمت بالتمام و کمال[۲۷۷] بمالکان رسانیدند.

ان باعه[۲۷۸] بالحقّ و لا حق له فیه قلیلا و کثیرا و لا دعوی علی نفسه بذلک العدول وکل ما[۲۷۹] [اتصل][۲۸۰] بجمیع ما ذکر و سطر من [مفتتح][۲۸۱] الکتاب الی محکمة الحکم الحاکم من (آقر: ۱۲ر) حکام المسلمین [والی][۲۸۲] من ولاة المؤمنین و هو الذی ثبت عنده الملکیّة و الوکالة و هو الحاکم المسجّل __اعزّ اللّه من والاه[۲۸۳] و اذلّ من [عاداه][۲۸۴]__ [و قضی][۲۸۵] المشروعیة حکما جزما و مکّن[۲۸۶] المشتری من التصرّف فی المبیع و قرّره فی یدیه تمکینا حکما جاریا و تقریر[۲۸۷] (کم: ۳۸۹) شرعیّا لازما و ذلک فی شهور سنة ستّ و ثمانمائة من الهجریّة. (دت: ۱۱پ)

II（7）ワクフ文書②

موضـــــــــع	آل تـــمـــغـــا	چـــهـــار عـــلـــ	موضـــــــــع
اللّه محمّد علی			مهر که در سر
راستی رستی			بند است
العبد تیمور			

موضـــــــــع	موضـــــــــع
مهر	مهر

امّا بعد، سبب تحریر ذکر[۲۸۸] این وثیقهٔ شرعیّه آن است که چون پادشاه عاقل کامل عادل[۲۸۹]، السلطان الاعظم، الخاقان المعظّم، مولی ملوک العرب و العجم __خلّد اللّه ملکه و سلطانه__ این بعضی قریه و مزارع که بموجب این سند شرعی‌شعار بزر حلال خود خریده و برضاء و رغبت خود [بذکور اولاد وقف][۲۹۰] حضرت سلطان[۲۹۱] العارفین و برهان السالکین سلطان خواجه علی صفوی الحسینی نموده که ﴿یوم لا ینفع مال و لا بنون الاّ من اتی اللّه[۲۹۲] بقلب سلیم﴾ [ق ۲۶: ۸۸-۸۹] ثواب آخرت باشد و نیز[۲۹۳] عالمیان را بتخصیص اولاد کرام آن حضرت را معلوم باشد که ما هم از مشتریان یوسف صدّیق اللّه بوده‌ایم و کمترینی

---

۲۷۷ مم و کم: الکمال.

۲۷۸ دت: باعیه.

۲۷۹ در دت و مم «ما» نیست.

۲۸۰ آقر: التصل.

۲۸۱ آقر و دت و مم: مفتح.

۲۸۲ آقر: وال؛ مم: و والی؛ کم: و وال.

۲۸۳ دلبری ۲۸۸: واله.

۲۸۴ آقر: عاده.

۲۸۵ آقر و دت و مم و کم: و قفی؛ دلبری ۲۸۸: وقفی.

۲۸۶ دلبری ۲۸۸: کمن.

۲۸۷ مم و کم: تقریرا؛ دلبری ۲۸۸: تقدیر.

۲۸۸ مم و کم: تحریر و ذکر.

۲۸۹ در دلبری ۲۸۸ «عادل» افتاده است.

۲۹۰ آقر: بذکور اولاد و وقف.

۲۹۱ در دت «سلطان» نیست.

۲۹۲ در دت «اللّه» نیست.

۲۹۳ در مم و کم بجای «و نیز»، «مر» نوشته شده است.

از جمیع[۲۹۴] محبّان و مریدان آن خاندان عالی‌شأن بوده‌ایم (آقر: ۱۲پ) تا بدنیا و آخرت نظر مرحمت و شفقت و عنایت از ما بر نگیرند[۲۹۵] که ﴿ انّ اللّه لا یضیع اجر المحسنین﴾ [ق ۱۱: ۱۱۵].

و تولیّت این املاک را بموجب [این] سند [بذکور اولاد جناب سیادت و سعادت‌نصابی][۲۹۶]، تقویّت و دیانت و فضیلت و کمالات آثاری، سیّد علی منصور بن سیّد جمال الدین بن سیّد علی منصور بن سیّد جبرئیل الحسینی رجوع نمودیم که نسلا بعد نسل بهرجات[۲۹۷] و فواید این املاک را ضبط و غبط نموده و هر ساله بخدمت حضرت سلطان العارفین و (مم: ۳۹۳) برهان السالکین (دت: ۱۲ر) و مرشد اهل یقین، سلطان خواجه علی بن سلطان شیخ صدر الدین موسی (کم: ۳۹۰) بن سلطان[۲۹۸] شیخ صفی الدین اسحق بن سیّد جبرئیل الحسینی و اولاد کرام ایشان برسانند[۲۹۹] و نرسد هیچ آفریده را از [سلاطین][۳۰۰] و سادات و مشایخ و قضات و غیره که دعوی ملکیّت و تولیّت برین املاک مذکوره نمایند، سوای از اولاد سلطان خواجه علی و اولاد سیّد علی منصور مشار الیه که ملکیّت بسلطان خواجه علی و اولاد او[۳۰۱] متعلّق است و تولیّت بسیّد علی منصور و اولاد او متعلّق است[۳۰۲] و ایشان در این امر دست مطلقند و غیر ایشان را دخل[۳۰۳] نیست.

نعوذ باللّه اگر یومی از ایّام احدی از آحاد[۳۰۴] خلاف این معنی بظهور رساند و دست ظلم و تعدّی دراز کند، بلعنت خدا و سخط رسول اللّه و خون امام حسن و امام حسین[۳۰۵] __علیهما السلام[۳۰۶]__ گرفتار شود و حاکم شریعت (آقر: ۱۳ر) و سلاطین عصر را باد که بعد از تاریخ ذیل اگر احدی از آحاد[۳۰۷] از این وقفیات موضعی یا قریه‌ای یا قطعه‌ای[۳۰۸] یا دانگی یا جوی یا حبّه‌ای از اجداد او [۳۰۹] باو رسیده یا خود از دیگری خریده یا بایر شکافته و تصرّف نموده و هزار سال برین تاریخ[۳۱۰] گذشته باشد، چون وارث[۳۱۱] این وقفیات طلب[۳۱۲] کند، باید که امداد نموده، تسلیم او[۳۱۳] نمایندو بحیلهٔ شرعی و رشوت دنیا نپوشانند و روح ما را از خود شاد بکنند[۳۱۴] و حقّ و سعی مرا ضایع نگردانند تا فردای قیامت[۳۱۵] از عهدهٔ امور خود بیرون آمده، خجل و شرمسار نباشند ﴿قوله تعالی انّ اللّه لا یضیع اجر المحسنین﴾ [ق ۱۱: ۱۱۵] فی شهور سنة ستّ و ثمانمائة لهجریّة[۳۱۶]. تمت[۳۱۷].

---

[۲۹۴] در مم و کم «جمیع» نیست.

[۲۹۵] دت و مم و کم: باز نگیرند.

[۲۹۶] آقر: بذکور اولاد بجناب سیادت‌نصابی ؛دت: بذکور اولاد بجناب سیادت و سعادت‌نصابی.

[۲۹۷] دلبری ۲۸۹: و مهرجات.

[۲۹۸] در مم و کم «سلطان» نیست.

[۲۹۹] مم و کم: برساند.

[۳۰۰] آقر و دت: سلاطین و سلطان.

[۳۰۱] در مم «او» نیست.

[۳۰۲] در دت عبارت «و تولیت بسیّد علی منصور و اولاد او متعلق است» نیست؛ در مم و کم فقط «است» نیست.

[۳۰۳] کم: دخلی.

[۳۰۴] مم و کم: یومی از ایام و احدی از آحاد.

[۳۰۵] دت: امام حسین و امام حسن.

[۳۰۶] در دت «علیهما السلام» نیست.

[۳۰۷] مم و کم: گرفتار باشد. ذیل: اگر احدی از آحاد...

[۳۰۸] مم و کم: قطعه زمینی.

[۳۰۹] مم و کم: حبّه‌ای از حبّات.

[۳۱۰] در مم و کم «تاریخ» نیست.

[۳۱۱] در مم «وارث» نیست.

[۳۱۲] کم: مطالعه.

[۳۱۳] در مم و کم «او» نیست.

[۳۱۴] دت: کنند.

[۳۱۵] دت و مم و کم: فردا در عرصات قیامت.

[۳۱۶] دت: فی شهور سنة ۱۰۳۸؛ در مم و کم «لهجریة» نیست.

[۳۱۷] در دت و مم و کم «تمت» نیست.